

島根県松江市

松江東工業団地内発掘調査報告書



文化財愛護
シンボルマーク

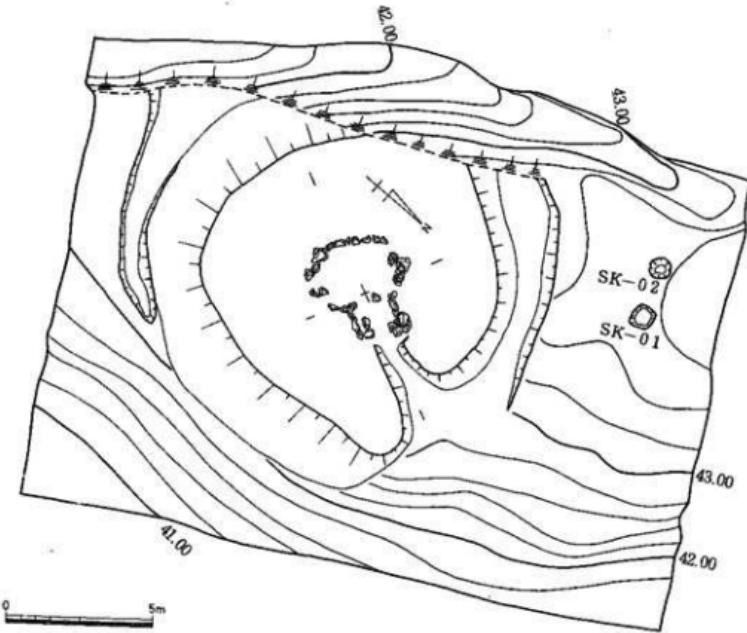
鉢田遺跡・朝酌荒神谷遺跡
イガラビ遺跡・イガラビ古墳群
池ノ奥古墳群・池ノ奥C、D遺跡

1990年3月

松江市
松江市教育委員会

お願い／＼

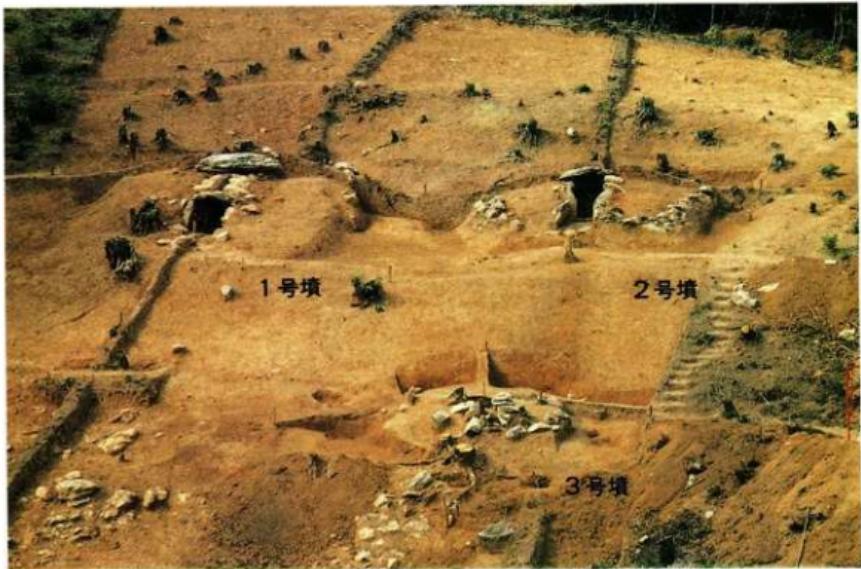
P 338 第1図及び P 347 第7図に誤りがありましたので
本紙の図版とそれぞれ差しかえて（貼付け）ください。



第1図 池ノ奥 1号墳調査成果図



第7図 池ノ奥1号墳壙片(I-63)の散布状況



イガラビ1～3号墳全景



池ノ奥2号墳周溝出土・特殊円筒棺



イガラビ遺跡出土・小形台座型土製品(左)・灯明皿(右)



池ノ奥C遺跡出土・特殊円筒棺 i 類

池ノ奥C遺跡出土
特殊円筒棺A類



人物



馬



辻金具を表現した馬



池ノ奥C遺跡出土・特殊円筒棺A類人物と馬

序 文

山陰の中核都市である松江市の総合的な発展を目指した東工業団地の開発に先立ち、私達は昭和59年度から4ヶ月をかけて候補地一帯の調査を行った。その後さらに2年間を費やして出土遺物と調査結果の整理を行い、ようやく報告書をお届けする運びに至ったところである。

この地域は往古「朝酌郷」と呼ばれた土地である。考えてみれば出雲国風土記の時代には松江という地名も集落もない。国庁に代表される政治文化の中心は南郊の山代郷・大草郷であったが、朝酌郷は東西に連なる海峡をはさんでその山代・大草と対し、明るく生産的な土地柄であった。風土記は二三の文をこの郷のために用いて土地の活況を描いている。この里は後世の朝酌町大井町などに当たるがここは歴史の黎明期においていわば工業団地であった。良質の土をはじめ恵まれた立地条件によってここには製陶の窯が古墳時代から数多く築かれていた。須恵器の生活用品や祭祀具の生産が人々に喜びとうるおいをもたらしていたと想像される。

中でも大井には從来から周知されてきた大井古窯跡群がある。(出雲国風土記には「大井浜・・・また陶器を造れり」とあるがこれは他に例を見ない記事である。) 今回はじめて3基の窯と、それに関連する古墳群について本格的に調査し、古代出雲の須恵器生産の実態に迫ろうとした。そうした解明の糸口をつかみ、後期古墳文化の考察に努めたところである。またこの地方は古くは海陸交通の要衝でもあり、こここの豪族は須恵器生産という半ば独占的な事業を営むことによって対岸の強大な政治勢力と密接な関係を保ち、繁栄を招いていたものと考察できる。

この調査事業に当たって地元有志の方々と団体、松江市の経済部などの関係諸機関より多大の御協力をいただいた。また、故野津左馬之助先生・加藤義成先生をはじめ先学諸賢に衷心より謝意と敬意を表し、難問題の山積する昨今であるが益々活発に研究と協力が進められることを期待する次第である。

1990年3月

松江市教育委員会

教育長 内田 荣

松江東工業団地内発掘調査報告書

1. 本書は昭和59～62年度に実施した、島根県松江市朝酌町、大井町地内の松江東工業団地造成予定地に係る発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、松江市教育委員会が松江市経済部の依頼を受けて実施したものである。
3. 調査組織は次のとおりである。

依頼者	松江市経済部	部長	中島 貞義（昭和61年 3月まで）
		〃	長岡 栄（昭和61年 4月から）
同事務局	東工業団地開発事務所	所長	武田 富雄（昭和63年 3月まで）
		〃	柳浦 啓志（昭和63年 4月から）
		開発係長	古藤 安正（昭和60年 3月まで）
		〃	井ノ口正二（昭和60年 4月から）
		主任	深津 浩完（昭和60年 3月まで）
		技師	石倉 正明（昭和61年 3月まで）
		〃	松本 純一（昭和63年10月まで）
		主事	田中 哲也
		〃	庄司健太郎（昭和60年 4月から）
	商工観光課	課長	田中 正友（平成元年 4月から）
		商工係長	岸 正紀（平成元年 4月から）
		主事	田中 哲也（平成元年 4月から）
		〃	庄司健太郎（平成元年 4月から）
発掘調査主体者	松江市教育委員会	教育長	内田 榮
		教育次長	大谷 利夫（昭和63年 3月まで）
		〃	菊池 義治（昭和63年 4月から）
	社会教育課	課長	野津 久夫（平成元年 3月まで）
		〃	杉原 精訓（平成元年 4月から）
		文化係長	岡崎雄二郎

4. 発掘調査担当者及び調査期間等は次のとおりである。

調査年度	遺跡名	調査地番	調査担当者	調査期間
59	伊田遺跡	松江市朝馳町453-1他	錦織慶樹	昭和59年12月17日～昭和60年2月2日
60	朝馳荒神谷遺跡	松江市朝馳町425他	中尾秀信	昭和60年4月22日～昭和60年7月30日
	イガラビ遺跡	松江市大井町931他	中尾秀信 昌子寛光	昭和60年8月1日～昭和60年12月27日
61	イガラビ遺跡	松江市大井町931他	岡崎雄二郎	昭和61年4月7日～昭和61年9月16日
	イガラビ古墳群	松江市大井町1273	中尾秀信	昭和61年5月28日～昭和61年10月31日
	池ノ奥塗跡群	松江市大井町904他	岡崎雄二郎 中尾秀信	昭和61年9月22日～昭和62年1月16日
62	池ノ奥D遺跡	松江市大井町914-2他	岡崎雄二郎	昭和62年4月2日～昭和62年4月13日
	池ノ奥C遺跡	松江市大井町909他	岡崎雄二郎	昭和62年4月2日～昭和62年8月11日
	池ノ奥A遺跡	松江市大井町1286他	庄司健太郎	昭和62年4月2日～昭和62年8月31日
	池ノ奥塗跡群	松江市大井町904他	昌子寛光	昭和62年4月2日～昭和62年9月7日
	イガラビ古墳群	松江市大井町1273	中尾秀信 庄司健太郎	昭和62年4月2日～昭和62年12月18日
	池ノ奥古墳群	松江市大井町1286他	岡崎雄二郎	昭和62年6月5日～昭和62年9月24日

◇調査員

昭和59年度 中尾秀信（社会教育課主事）、昌子寛光（松江市立女子高等学校教諭）
 昭和60年度 庄司健太郎（東工業団地開発事務所主事）、佐々木稔（同嘱託員）、瀬古諒子（同）、萩雅人（同）、今岡一三（同）、錦織慶樹（同）
 昭和61年度 庄司健太郎、佐々木稔、瀬古諒子、藤原裕子（東工業団地開発事務所嘱託員）、木村尚文（同）、吾郷雄二（社会教育課主事）、寺木康（同）
 昭和62年度 佐々木稔、瀬古諒子、藤原裕子、稻田堤（東工業団地開発事務所嘱託員）、吾郷雄二

◇調査協力者

飯塚康行（社会教育課主事）、青木博（社会教育課嘱託員）、宇野美智子（社会教育課指導員）、山根洋子（同）、松江市土地開発公社、ウエスコ㈱島根支社、松江土建㈱、㈲松江重送土木、野津本吉郎（郷土史家）

◇屋外作業員

青山かほる、青山君代、青山登美子、青山安子、石川サチ子、稻田トメ子、今尾浩也、今尾富喜子、上野丈二、内田禪子、黒田研治、佐々木一夫、須山恵美子、高階智也、坪倉重子、野津郁子、野津包道、野津喜久雄、野津キワ子、野津林子、野津静枝、野津筋枝、野津千代子、野津俊子、野津智恵、野津初枝、野津弘子、野津文子、野津正恵、野津美恵子、野津守一、野津芳子、野津義美、野津礼子、林 義徳、福田邦光、福田 醇、松本敏征、水野真吾、吉岡厚美、吉岡英治、吉岡久雄、吉岡光子、吉岡八重子、吉村春枝、米原国子

◇遺物整理員

安部綾子、内田真弓、小村明子、安藤美知枝、井ノ口圭子、井ノ口臣、江角明美、門脇稔明、木村和子、景山美知子、隅岡美千代、高木晴美、中原美世子、野島伊都子、松浦徳子、吉岡三枝子、吉岡梨智子、渡部 好、松林みよ子、荻野哲二

5. 調査の実施及び報告書の作成に当たっては、次の方々の協力と指導を得た。記して感謝の意を表する次第である。

山本 清（島根大学名誉教授）、渡辺貞幸（同助教授）、川原和人（島根県教育庁文化課）、卜部吉博（同）、丹羽野裕（同）、足立克巳（同）、広江耕史（同）、内田律雄（同）、柳浦俊一（同）、平野芳英（島根県立八雲立つ風土記の丘資料館）、近藤加代子（同）、三宅博士（島根県教育文化財団）、的野克之（島根県立博物館）、赤沢秀則（鹿島町教育委員会）、浅沼政志（東出雲町教育委員会）、木原光（益田市教育委員会）、根鈴輝雄（倉吉市教育委員会）、吉野高光（福島県双葉町教育委員会）、村上 勇（広島県立美術館）、貴谷美宜（神戸市立博物館）、山本正敏（富山県埋蔵文化財センター）、間壁忠彦（倉敷考古館）、間壁蔵子（同）、椿 真治（岡山県教育委員会）、竹下浩征（島根大学研究生）、石倉一弘（八雲村山雲庵元）、柏原市歴史資料館、小田富士雄（福岡大学教授）、中村 浩（大谷女子大学助教授）、西谷 正（九州大学教授）、水野正好（奈良大学教授）、巽淳一郎（奈良国立文化財研究所）、町田 章（同）、花谷 浩（同）、関川尚功（奈良県立櫛原考古学研究所）、田辺征夫（奈良国立文化財研究所平城宮発掘調査部）、千田剛道（同）、金子裕之（同）、藪 英伍（堺市教育委員会）、石田 修（同）、白神典之（同）、内本勝彦（同）、近藤 澄（滋賀県文化財保護協会）、松澤 修（同）、平井美典（同）

鶴垣正宏（同）、松下 彰（和歌山県立紀伊風土記の丘管理事務所）、伊藤 純（大阪市文化財協会）、田中清美（同）、宮本佐知子（同）、富加見泰彦（大阪府埋蔵文化財協会）、岡戸哲紀（同）、山上雅弘（同）、小林義孝（大阪府立泉北考古資料館）、中井定夫（同）、泉本知秀（大阪府教育委員会）、宮野淳一（同）、鳥取県会見町教育委員会、柳田純孝（福岡市教育委員会）、柳沢一男（同）、日野琢郎（鳥取県閲金町教育委員会）、定森秀夫（京都府京都文化博物館）

6. 本書の作成に当たって、下記の方々から原稿を賜わった。

伊藤晴明（島根大学理学部教授）、時枝克安（同助教授）、安田博幸（武庫川女子大学薬学部教授）、森真由美（同助手）、清永欣吾（日立金属株式会社安来工場）、三辻利一（奈良教育大学教授）、三浦 清（島根大学教育学部教授）

7. 本書で使用した遺構の略号は、それぞれSB(掘立柱建物)・SD(溝状遺構)・SK(土壤)、SX(不明遺構)を表わす。

8. 出土遺物はすべて松江市教育委員会で保管している。

9. 本書の執筆及び編集は、第1・2章を岡崎と中尾、第3章第1・2・4・5節を中尾と藤原、同第3節を庄司、同第6節を岡崎と瀬古、同第7節を種田、同第8節を昌子と佐々木、第5章を岡崎がそれぞれ行なった。

文化財愛護シンボルマークとは……

このマークは昭和41年5月26日に文化財保護委員会（現文化庁）が全国に公募し、決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。

その意味するところは、左右にひろげた両手の掌が、日本建築の重要な要素である 卓犠 、すなわち 犀 と 犀 の組み合わせによって全体で軒を支える腕木の役をなす組物のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財というみんなの遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していくこうというものです。



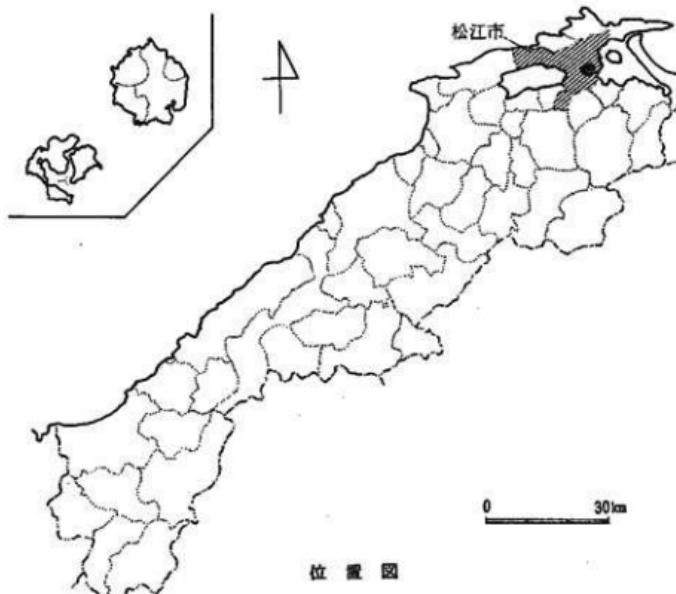
文化財愛護
シンボルマーク

目 次

第1章 調査に至る経緯	I- 5
第2章 位置と歴史的環境	I- 6
第3章 各遺跡の調査概要	I- 15
第1節 鈴田遺跡	I- 17
1. 調査に至る経緯	I- 19
2. 調査の概要	I- 19
3. 出土遺物	I- 22
4. 小結	I- 29
第2節 朝酌荒神谷遺跡	I- 37
1. 調査に至る経緯	I- 39
2. A区	I- 39
3. B区	I- 48
4. 遺物について	I- 52
5. 小結	I- 57
第3節 イガラビ遺跡	I- 73
1. 調査に至る経緯	I- 75
2. 調査の概要	I- 75
3. 遺構と遺物について	I- 76
4. 出土遺物の検討	I- 134
5. 小結	I- 143
附編 池ノ奥窓跡群4号窓附近に見られる金属様破片について	I- 147
第4節 イガラビ古墳群	I- 207
1. 調査の概要	I- 211
2. イガラビ1号墳	I- 211
3. イガラビ2号墳	I- 234
4. イガラビ3号墳	I- 247
5. イガラビ1~3号墳周辺で出土した遺物について	I- 256

6. イガラビ 4 号墳	I-263
7. イガラビ 5 号墳	I-267
8. イガラビ 6 号墳	I-274
9. イガラビ 7 号墳	I-276
10. イガラビ 8 号墳	I-280
11. イガラビ 4 ~ 8 号墳周辺で出土した遺物について	I-283
第5節 池ノ奥古墳群	I-335
1. 位置と調査の概要	I-337
2. 池ノ奥 1 号墳	I-337
3. 池ノ奥 2 号墳	I-361
4. 小結	I-378
第6節 池ノ奥 C・D 遺跡	I-413
1. 調査に至る経緯	I-415
2. 調査の概要	I-419
3. 遺構の検討	I-473
4. 遺物の検討	I-475
5. 小結	I-480
第7節 池ノ奥 A 遺跡	II- 5
1. 調査に至る経緯	II- 7
2. 調査の概要	II- 7
3. 遺物の検討	II- 54
4. 小結	II- 57
附編 池ノ奥 A 遺跡 G 区出土(第5層)の黒曜石片の性質とその産地 の同定	II- 59
第8節 池ノ奥窯跡群	II- 91
1. 調査の経過について	II- 93
2. 遺跡の立地と周辺の窯跡について	II- 97
3. 調査の概要	II-100
4. 小結	II-234
第4章 自然科学的考察	II-383

第1節 松江東工業団地内遺跡群出土の土器に塗布された赤色顔料物質26試 料の微量元素分析	II-385
武庫川女子大学薬学部 安田 博幸, 森 真由美	
第2節 池ノ奥窓跡群、および、その周辺の遺跡出土須恵器の蛍光X線分析	II-391
奈良教育大学 三辻 利一	
第3節 池ノ奥窓跡の熱残留磁気による年代測定	II-419
島根大学理学部 伊藤 晴明, 時枝 克安	
第4節 朝酌地区鉢田遺跡出土鉄滓の調査	II-427
日立金属㈱ 安米工場 清永 欣吾	
第5節 地質・鉱物学的にみた大井周辺出土の土師器および須恵器片 —その原料土をめぐって—	II-445
島根大学教育学部 三浦 清	
第5章 まとめ(総括)	II-457



位 置 図

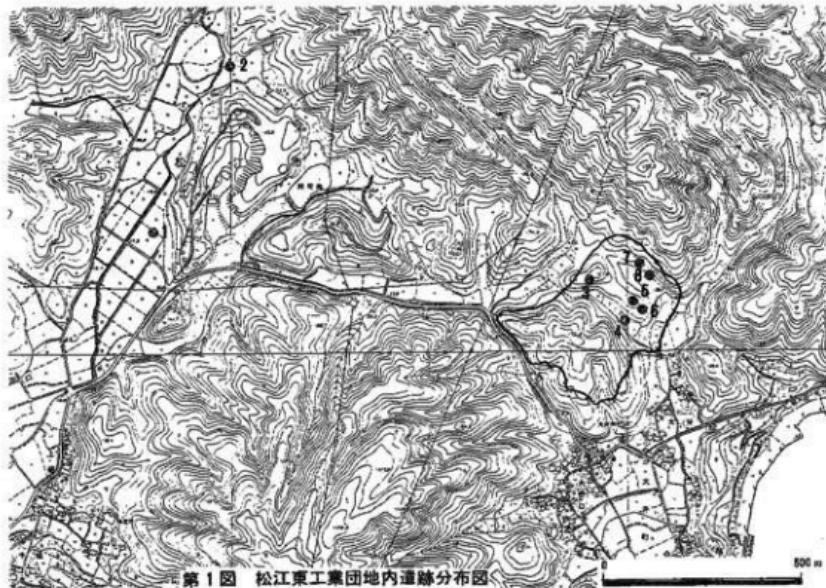
第1章 調査に至る経緯

本市では、産業の近代化、雇用の創出を図り、活力ある街づくりを目指すため、昭和57年度から企業誘致を推進することを目的として、工業団地の開発に取り組むことになった。

その候補地については、松江市経済部において調査、検討の結果、市内朝駒町と大井町地内に決定し、松江東工業団地と命名された。

市教育委員会で昭和57年7月30日及び昭和59年12月23日の両日、当該両地区における埋蔵文化財包蔵地の分布調査を実施したところ、朝駒地区において7ヶ所、大井地区において18ヶ所の遺跡が確認された。この両地区は、従来から遺跡の密集地帯であり、周知の遺跡も多数あったが、新発見の遺跡もあり、これらの調査にかかる期間は数年、調査費用も数千万円を要する見込みとなった。

そこで、協議した結果、昭和59年度において朝駒地区の遺跡から調査を開始することに



1. 納田遺跡
2. 朝駒荒神谷遺跡
3. イガラビ古墳群
4. イガラビ遺跡
5. 池ノ奥古墳群
6. 池ノ奥C・D遺跡
7. 池ノ奥A遺跡
8. 池ノ奥窯跡群

なった。対象地は、^{たたらでん}伊田遺跡と朝駒荒神谷遺跡等である。

この間、事業の実施について検討された結果、まず大井地区から事業化することになったので、昭和60年度の中途からは大井地区的調査に移行した。

大井地区的対象地は、当初イガラビ遺跡、池ノ奥古墳、池ノ奥A、同B遺跡の4ヶ所であったが、イガラビ遺跡の調査中昭和60年度において新たにイガラビ古墳群（1,2号墳）2基と、池ノ奥古墳の東方斜面下に大型の組合せ石棺を発見した。伐開してみたところ、これも古墳の横穴式石室であることが判明した。

そこで当初の池ノ奥古墳を池ノ奥第1号墳とし、新発見の古墳を池ノ奥第2号墳とした。又、昭和61年度においてイガラビ1,2号墳の調査中、2号墳直下の斜面の集石地から第3号墳を発見、さらにこれら1～3号墳の東方やや離れた尾根直下の緩斜面において4～8号墳を発見した。

一方、池ノ奥A,B遺跡については溜池周辺から須恵器片が採集されていたので、この谷間周辺を伐開したところ、池ノ奥B遺跡の北側斜面において須恵器窯の窯体断面と思われる火熱を受けた窯塊や炭化物や須恵器片を多量に混じえた落込みを5ヶ所発見した。

そこで、池ノ奥B遺跡を池ノ奥窯跡群（推定5基）として調査を実施することになった。さらに昭和61年度においてイガラビ遺跡を調査中、北側の丘陵斜面で竹管文や突帯で飾られた特異な甕片を採集したので発見地の直上の丘陵尾根を分布調査したこところ、同類の特異な甕片が多数発見された。そこで、尾根一帯を池ノ奥C遺跡とし、その東側の丘陵突端部の高まりを古墳又は土塙墓と推定し、池ノ奥D遺跡と呼称して調査することになった。

第2章 位置と歴史的環境

1. 朝駒地区

朝駒平野周辺に所在する古墳には65魚見塚古墳をはじめ、66朝駒岩屋古墳が大規模な古墳である。

魚見塚古墳は、全長62mの前方後円墳で、水田地からはずれて、現在の大橋川（風土記時代には南の入海であつただろう）に面した低い台地上に立地しており、朝駒平野を主要な生産基盤にしていたことに加えて、軍事上、水上交通上の拠点であった福富地区の利権



(八束郡) 意東の浜より中海を隔てて大井を望む



大井町遠景（中海大橋より）

を掌握していた大豪族の奥都城であったと考えられる。

50廻所古墳も一辺53×44mの比較的規模の大きな古墳であり、中期古墳と考えられる。

廻原の丘陵には、かつて組合せ石棺を主体とする古墳時代後期の52廻原古墳群があった。その数は、10基以上になるものと思われるが、戦後の茶園造成や、朝酌小学校の造成などによってほとんど消滅している。採集された須恵器から判断すると、6世紀後半ごろから7世紀前半代のものが大半であろうと思われる。

7世紀代に入ると所謂“石棺式石室”を内部主体とする小規模の古墳が朝酌地域を中心に比較的多く造られるようになる。周辺では、特田地域、大庭地域と地域的に限定される傾向にある。このことは、石棺式石室を採用することで部族間の緊密な政治的関係を保つことを示したものであり、後代の政治的秩序にも大きな影響を及ぼしたと考えられる。その中枢には、松江周辺を版図とする強力な豪族がいたことを示している。

46九日宮古墳群は、5基から成り、内、石室が開口したものをみると、横長タイプの石室が2基、縦長タイプの石室が1基ある。東向きの斜面に造られているが、石室の入口は、いずれも南方へ開口しており注意される。

66朝酌岩屋古墳は、墳丘の規模は小さいが、石棺式石室は大型で精巧に造ってある。半島部でも最大規模を誇り、朝酌地域を支配した有力豪族の墓と思われる。他にも51朝酌小学校校庭古墳や62阿弥陀寺古墳がある。

これと平行して、横穴式石室の系統ではあるが石棺式石室の影響を受けた小規模の横穴式石室をもつ古墳も多く造られるようになる。

68朝酌上神社跡古墳は、横長タイプの石室を有する。

終末期には、53廻原1号墳のように横口式石槨を内部主体とした古墳もある。これは、床面と側壁を一枚の石でコの字状に削抜き、その上に蓋石をかぶせたもので、岡山県総社市の長砂古墳や畿内の終末期古墳に類似が求められる。

2. 大井地区

大井の地は、松江の市街地からおよそ6km東方の中海に面した農村である。農地では一部中海を対象とした沿岸漁業が行われている。

南方には、大橋川の河口を望み、北西に朝酌平野を隔てて嵩山、和久羅山の山塊が広がっている。

三方を山に囲まれ、南方中海の方向に谷の入口を開けている。

この地区には、他地域にはない特徴的な遺跡がある。すなわち、須恵器を焼成した窯跡

第2図 周辺の測定分布図



第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	名 称	所 在 地	種 別	概 要
1	岩 汐 窯 跡	大井町岩汐	窯跡	4基。須恵Ⅰ～Ⅳ
2	ババタケ 窯 跡	大井町ババタケ	窯跡	須恵Ⅰ～奈良期、土器、灰原
3	越 谷 向 垣 窯 跡	大井町	窯跡	3基。須恵Ⅰ期
4	寺 尾 窯 跡	大井町寺尾	窯跡	窯壁塊、須恵Ⅰ～Ⅳ期、灰原
5	勝 田 谷 窯 跡	大井町勝田谷	窯跡	須恵器、灰原
6	明 曾 窯 跡	大井町明曾	窯跡	灰原、須恵Ⅳ期～
7	池 ノ 奥 窯 跡	大井町池ノ奥	窯跡	Ⅲ期～糸切、3基確認
8	山 津 窯 跡	大井町山津	窯跡	灰原、窯壁塊、須恵Ⅲ期～奈良期
9	唐 干 窯 跡	大海崎町唐干	窯跡	須恵器
10	四 反 田 窯 跡	上宇部尾町四反田	窯跡	灰原、奈良期
11	岩 穴 半 遺 跡	大井町岩穴平	住居跡	建物、須恵Ⅱ期～Ⅳ糸切
12	薙 沢 A 遺 跡	大井町1118-1124	集落	堅穴6、掘立住居8、須恵Ⅲ～奈良期
13	薙 沢 B 遺 跡	大井町1064	遺物包含地	燒土遺構
14	別 所 遺 跡	朝鈴町555	遺物散布地	堅穴住居、掘立住居、須恵Ⅲ～平安期
15	薙 沢 野 山 遺 跡	大井町薙沢野山	遺物散布地	須恵器
16	薙 沢 遺 跡	大井町薙沢	遺物散布地	窯壁塊、須恵器
17	山 ノ 奥 遺 跡	大井町山ノ奥	遺物散布地	須恵器
18	井 ノ 奥 遺 跡	大井町井ノ奥	遺物散布地	須恵器Ⅲ～Ⅳ期
19	大 井 神 社 境 内 遺 跡	大井町	散布地	須恵器
20	大 谷 遺 跡	大井町大谷	遺物散布地	須恵器
21	赤 板 遺 跡	大井町赤坂	遺物散布地	須恵器
22	イ ガ ラ ピ 遺 跡	大井町イガラピ	遺物散布地	燒土墻、柱穴、掘立柱建物1棟
23	池 ノ 奥 A 遺 跡	大井町池ノ奥	散布地	須恵Ⅳ期～糸切り
24	山 津 遺 跡	大井町山津	遺物散布地	須恵Ⅲ～奈良期
25	十二所神社境内遺跡	大海崎町	遺物散布地	須恵器
26	木 ノ 谷 遺 跡	大海崎町木ノ谷	遺物散布地	須恵器(窯跡推定地)
27	古 屋 敷 遺 跡	大海崎町古屋敷	遺物散布地	須恵器(窯跡推定地)
28	岩 汐 遺 跡	大井町	遺物散布地	須恵器(窯跡推定地)
29	後 焱 遺 跡	大井町	遺物散布地	須恵器(窯跡推定地)
30	岩 汐 南 遺 跡	大井町	遺物散布地	須恵器、土師器
31	岩 汐 峠 遺 跡	大井町	遺物散布地	須恵器
32	鉢 田 遺 跡	朝鈴町鉢田	遺物散布地	鐵鋒、須恵器
33	荒 神 谷 遺 跡	朝鈴町荒神谷	遺物包含地	須恵器、溝跡
34	天 井 遺 跡	朝鈴町	散布地	須恵器
35	大 谷 遺 跡	朝鈴町大谷	散布地	須恵器、土師器

番号	名 称	所 在 地	種 別	概 要
36	新 山 遺 跡	朝鈴町新山	散布地	須恵器, 土馬, 勾玉
37	松 ケ 鼻 遺 跡	朝鈴町松ヶ鼻	遺物散布地	須恵器, 土師器
38	間 谷 遺 跡	西尾町1071	遺物散布地	須恵器
39	鞍 切 遺 跡	西尾町鞍切	遺物散布地	須恵器
40	角 森 遺 跡	八幡町635-1	遺物包含地	古式土師器
41	荒 神 谷 古 墳 群	朝鈴町荒神谷	古墳群	3基
42	觀 音 寺 古 墳 群	馬渕町觀音寺	古墳群	3基, 方墳
43	保 地 遺 跡	矢田町保地	散布地	縄文式土器, 邑生土器, 石鎌
44	石 台 遺 跡	東津田町石台	散布地	扁平打製石器, 扱入石斧, 石包丁石鎌, 石鏃
45	神 田 古 墳 群	上字部尾町	古墳	方墳4基
46	九 日 宮 古 墳 群	朝鈴町九日宮	古墳群	3基, 石棺式石室
47	米 板 古 墳 群	西尾町米板	古墳群	10基以上
48	朝 鈴 小 学 校 前 古 墓	朝鈴町	古墳	横穴式石室, 刀, 須恵器
49	觀 音 山 古 墓	西尾町觀音山	古墳	方墳, 円筒埴輪
50	廟 所 古 墓	西尾町	古墳	方墳
51	朝 鈴 小 学 校 庭 古 墓	朝鈴町	古墳	石棺式石室, 石床, 玄室幅2.05m, 奥行1.2m, 高さ1.4m
52	廻 原 古 墓 群	朝鈴町	古墳群	10基以上(現存6基)
53	廻 原 1 号 墓	朝鈴町	古墳	横口式石槨
54	別 所 古 墓	大井町別所	古墳	円墳状, 直径7m, 高さ1m, 簡略横長の石室
55	イ ガ ラ ピ 古 墓 群	大井町イガラピ	古墳群	横穴式石室8基, 小石室
56	池 ノ 奥 古 墓 群	大井町池ノ奥	古墳群	横穴式石室2基, 6c末~7c初頭
57	池 ノ 奥 C・D 遺 跡	大井町	散布地	Ⅶ期~糸切
58	イ ズ キ 山 古 墓 群	大井町イズキ山	古墳群	5基, 横穴式石室, 組合せ式石棺, 須恵器
59	向 山 古 墓	大井町向山	古墳	石棺式石室
60	山 卷 古 墓	大井町山巻	古墳	箱式石棺, 大量の須恵器, 須恵器
61	山 卷 遺 跡	大井町山巻	散布地	土師器
62	阿 弥 陀 寺 古 墓	福富町阿弥陀寺	古墳	石棺式石室, 玄室幅1.5m, 奥行1.7m
63	阿 弥 陀 寺 裏 山 古 墓 群	福富町阿弥陀寺	古墳群	5基, 1号墳~4号墳一辺7~8m, 高さ0.5~1m, 5号墳一辺18m
64	明 事 山 古 墓	福富町明事山	古墳	方墳, 一辺10m, 高さ1.5m
65	魚 見 嶺 古 墓	朝鈴町魚見嶺	古墳	前方後円墳, 全長62m, 造営推定5世紀
66	朝 鈴 岩 墓 古 墓	朝鈴町	古墳	規模18m, 高さ6m, 石棺式石室(円墳か?)
67	大 谷 古 墓 群	朝鈴町大谷	古墳群	方墳5基, 石室
68	朝 鈴 上 神 社 跡 古 墓	朝鈴町	古墳	2基, 円墳?横穴式石室
69	三 王 谷 古 墓	朝鈴町	古墳	方墳1基
70	南 尾 横 穴	西尾町	横穴	須恵器

番号	名 称	所 在 地	種 別	概 要
71	高良神社境内古墳	八幡町	古墳	方墳
72	迎接寺裏山古墳群	八幡町寺ノ後	古墳群	前方後円墳、方墳
73	薄 山 古 墓	八幡町	古墳	方墳
74	竹 矢 岩 舟 古 墓	竹矢町竹矢	古墳	前方後円墳1基、舟形石棺、埴輪
75	手 間 古 墓	竹矢町手間	古墳	前方後円墳(70m)、埴輪
76	荒 神 煙 古 墓	竹矢町井ノ奥	古墳	もと一辺30m前後の方墳か、中期円筒埴輪、滑石製有孔円板
77	井 ノ 奥 1 号 墓	竹矢町井ノ奥	古墳	方墳
78	石 屋 占 墓	東津田町石屋	古墳	方墳一辺40m、高さ8m、須恵器、土師器、形象埴輪、円筒埴輪
79	和 久 羅 山 城 跡	朝酌町	城跡	山城
80	布 自 枝 見 焼 跡	上東川津町	焼跡	嵩山頂、風土記所載
81	燒 山 連 跡	大井町燒山	遺物散布地	須恵器片、土師器片
82	福 富 神 社 境 内 遺 跡	福富町	散布地	須恵器片
83	大 井 古 墓 群	大井町	古墳群	3基

である。

今回調査した7池ノ奥窯跡を含めると今のところ大井地区に8ヶ所、大海崎地区に1ヶ所、上宇部尾地区に1ヶ所知られているが、窯跡の可能性のある土器散布地もあり、今後詳細な分布調査を実施すれば増加していくものと考えられる。

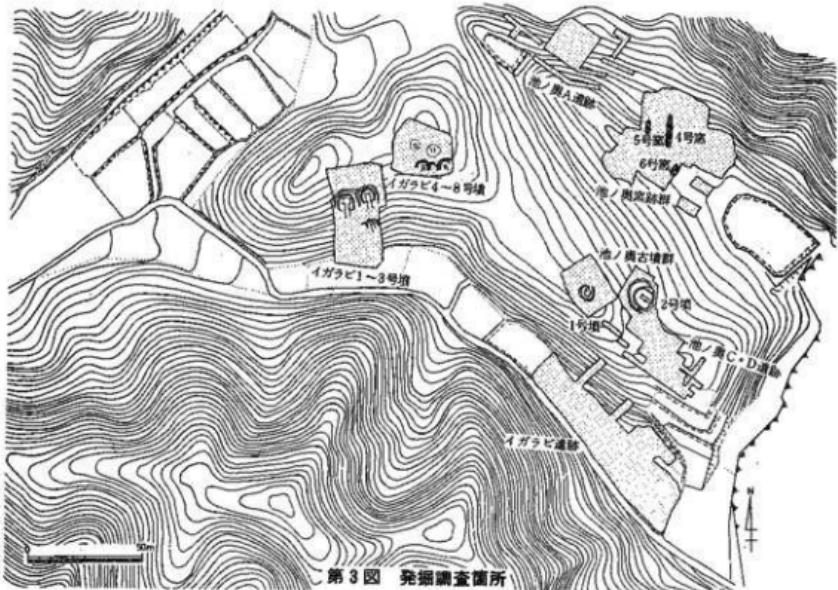
窯跡で最も古い段階のものは3廻谷窯跡で3基の窯跡の内、西側の窯跡の焼成部の断面から5世紀末の蓋壺と直口壺などが採集されている。次に6世紀前半の段階は、4寺尾窯跡が知られている。2ババタケ、1岩沙窯跡は6世紀後半～7世紀前半である。

その他の大多数の窯跡は7世紀～9世紀代にかけてのものである。9唐干と10四反田窯跡では、平瓦も焼成していた可能性が高い。

このようにおよそ400年間にわたり大規模な須恵器生産が展開されていたが、そのピークは、6世紀後半から8世紀代に至る期間で、古墳時代後期から奈良期に至る社会的需要と呼応するものである。

中世に入ると広島の亀山焼に類似した須恵器系の土器が散見される。大井町と朝酌町の境に所在する14別所遺跡では大量かつ集中的に亀山焼系の上器が出土し、中には高温度で二次焼成を受けた破片が多くあり窯跡が推定される。

天平五年(733)二月に完成した『出雲国風土記』によれば「大井浜・・・又、陶器を造れり。」とあり、奈良時代の前期には確実に須恵器生産をしていたことが文献の上からも実証されるのである。



第3圖 発掘調査箇所

次に古墳をみてみると、小規模の横穴式石室を主体とする83大井古墳群、58イズキ山古墳群、54別所古墳。今回調査した55イガラビ古墳群、56池ノ奥古墳群、以前調査された60山巻古墳も報告では組合せの石棺となっているが石組みが複雑であり、これも石室の一種と考えられなくもない。

古墳の規模も一辺（又はさしわたり）10mに満たないものが多く、とりわけ大規模な古墳は無い。古墳の築造はほとんど7世紀代に終了する。

83大井古墳群中に横穴墓が13穴認められるが半島部の分布密度をみた場合、松江市東部では散発的にしか分布していない実態からすれば、注意されるところである。横穴墓を構築するに適した土質ではあるが、分布がかたより、盛行していないという事実からすれば、後期のある時期に大井地域の支配機構に組み込まれていった特定の集団があったことを想定することが出来る。

集落遺跡では、12薙沢A遺跡や14別所遺跡で初めて古墳時代後期から奈良時代に至る堅穴住居跡や掘立柱建物が検出された。これらの遺跡は、大量の須恵器が出土したことから須恵器生産集団の住居と推定された。雌雄の性別を表現した多量の土馬の出土も注意されよう。

第3章 各遺跡の調査概要—I

鉢田遺跡

朝酌荒神谷遺跡

イガラビ遺跡

イガラビ古墳跡

池ノ奥古墳群

池ノ奥C・D遺跡

鉢 田 遺 跡

たたら でん
鉢 田 遺 跡

1. 調査に至る経緯

東工業団地造成工事の当初計画は、朝駒・大井地区にまたがった約38haに及ぶ大規模な計画であった。鉢田遺跡はその計画地域の朝駒地区西端部に位置している。工事に先立つ事前の分布調査では、須山牧場の西側丘陵の切削断面に数片の須恵器と土師器片が認められたので、この断面直下の水田地に幅2mのトレンチを4m間隔で、対象地全体に設定し、遺構と遺物の検出につとめることとした。

トレンチは南側からそれぞれA,B,C,……L,Mと呼称して丘陵地に対して直角に13本設定した。この後、数cmづつ土砂を除去して最終的に地山面まで排土し遺構面を検出することとした。

2. 調査の概要

A トレンチ

13本のトレンチのうち南端に位置する。幅2m、長さ4mのトレンチである。第1層耕作土以下18cm～28cmで第2層明灰褐色粘質土に達する。この層からは多量の鉄滓が出土した。特にトレンチ南東部では幅50cm、長さ1.5m、厚さ8cmにわたり堆積していた。第3層は青灰褐色粘質土で第2層に比較して砂性が強くなるほか若干の炭化物も含んでいる。第4層は灰褐色粘性土で第3層よりも更に砂性が強く、小穢（径約3cm）をも含む。最下層は灰褐色粘性土の地山面で、水田面下70cmを計る。

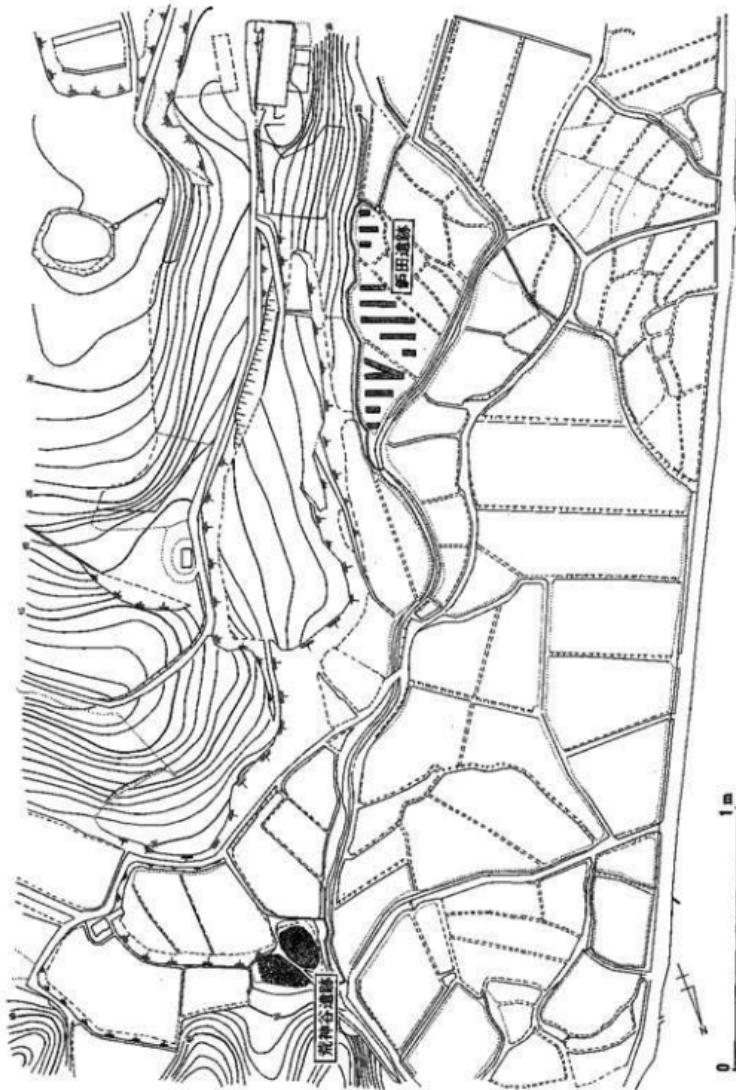
B トレンチ

A トレンチ北側に設定した幅2m、長さ7mのトレンチである。耕作土以下5層に分けられる。第2層は灰褐色粘質土で、水田面より28cmで第3層の青灰褐色粘質土に達する。この層はA トレンチと同様に多量の鉄滓が検出されている。

C トレンチ

B トレンチ北側に設定した幅2m、長さ4mのトレンチである。第3層で、A トレンチ、

第1図 舟田遺跡・荒神谷遺跡位置図



Bトレソチと同様の青灰褐色粘性土層があり鉄滓が検出されたが、A,Bに比べて約50%程度減少する。第4層は灰褐色の粘質の地山面であった。

Dトレソチ

A～Cトレソチを設定した水田の一段北側の水田に設定したトレソチである。D～Hトレソチを設定した。Dトレソチは長さ9mである。15～30cmで第2層青灰色粘土層に至る。第3層は径8～15cm大の円碟で構成される碟層であった。厚さ15cm以上を計るが、一部この碟層を除去したところ青灰色の粘土層である地山面に達したので、これ以後はこの碟層を検出した時点で調査を終了することとした。以下E～Mトレソチすべてでこの碟層が検出されている。

Eトレソチ

長さ14mを計る。2～3層に区分されるが、東側2mをのぞいては下層はすべて碟層となっている。鉄滓はDトレソチ以北ではほとんど検出されなかった。

Fトレソチ

Eトレソチ北側に長さ20mのトレソチを設定した。耕作土以下、暗褐色土と暗褐色粘性土の単純堆積層で最下層は碟層となっている。

Gトレソチ

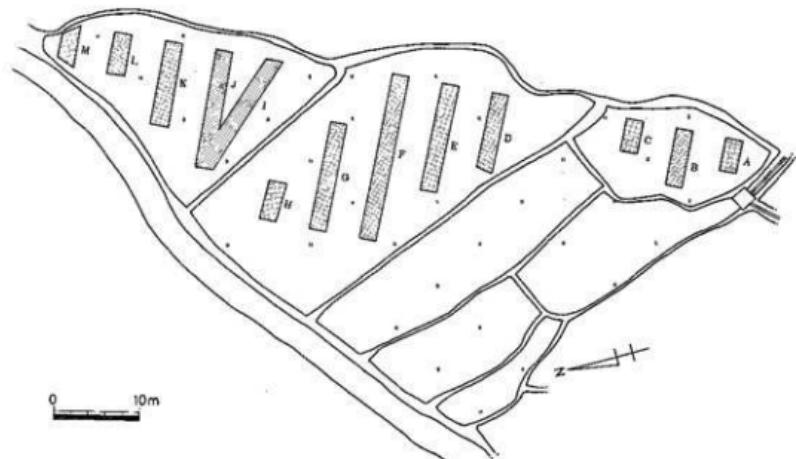
長さ13mのトレソチである。これもFトレソチと同様、暗褐色土と暗褐色粘性土の単純堆積層で最下層は碟層である。

Hトレソチ

長さ25mのトレソチである。D～Hまでの同じ水田内に設定したトレソチは、すべて耕作土と碟層の間に厚さ12～25cmの暗褐色土と暗褐色粘性土を含む単純堆積層であったが、本トレソチも他のトレソチと同様でなんら遺構面は検出されなかった。

I～Mトレソチ

D～Hトレソチより更に北側の水田に設定したトレソチ群である。これらのトレソチもD～Hトレソチと同様であるか、より層位が単純となり、K,L,Mの各トレソチでは20cm



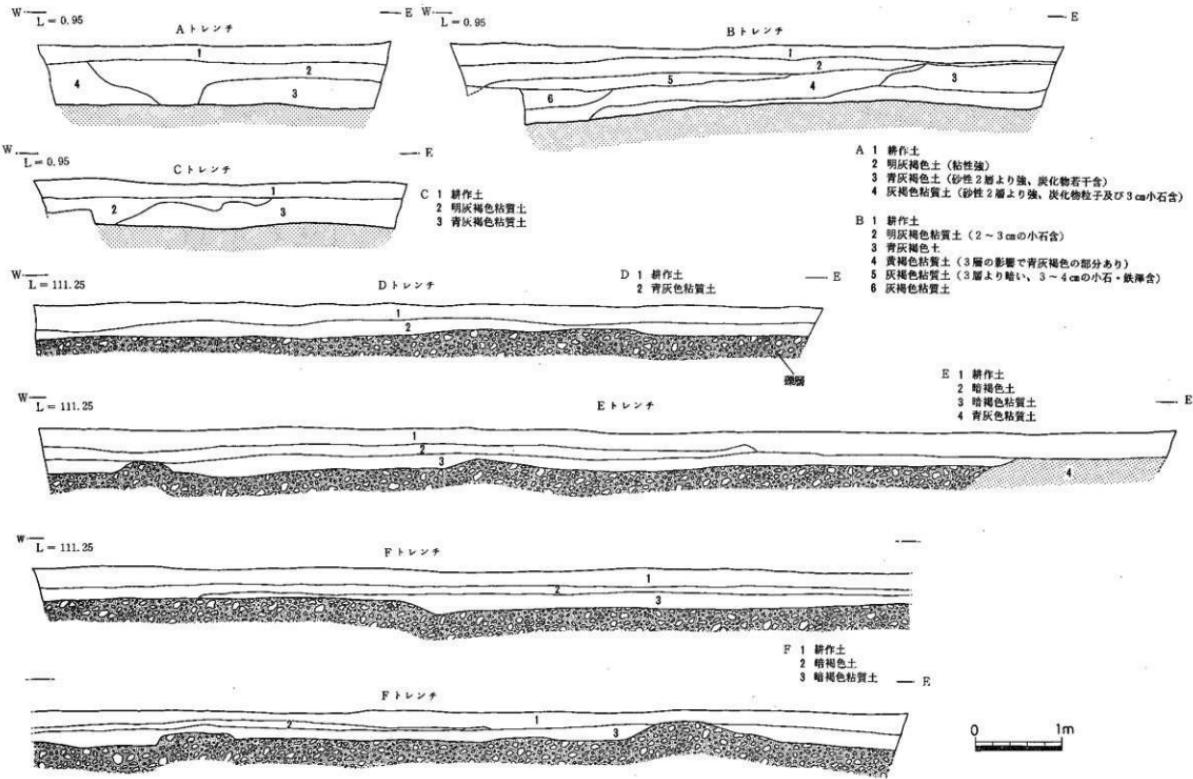
第2図 舟田遺跡トレンチ設定図

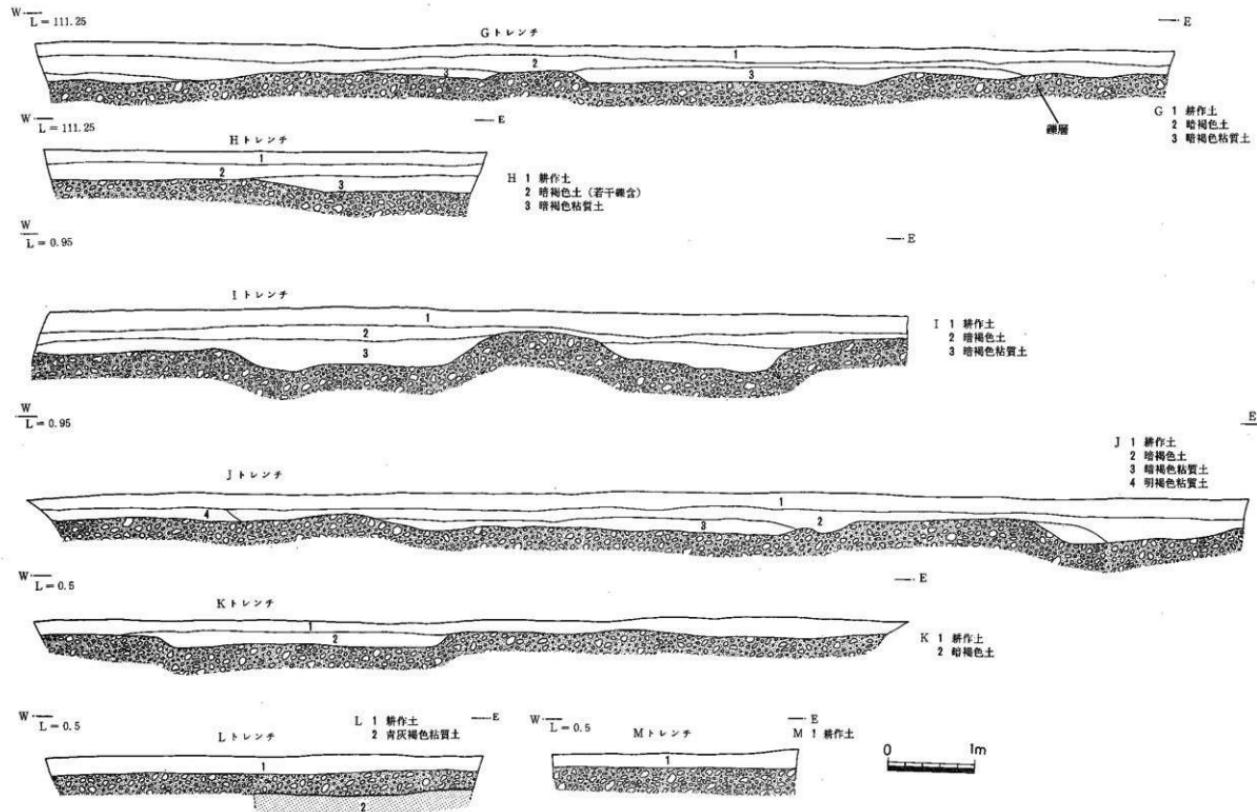
程度の耕作土の下で疊層となっている。

3. 出土遺物

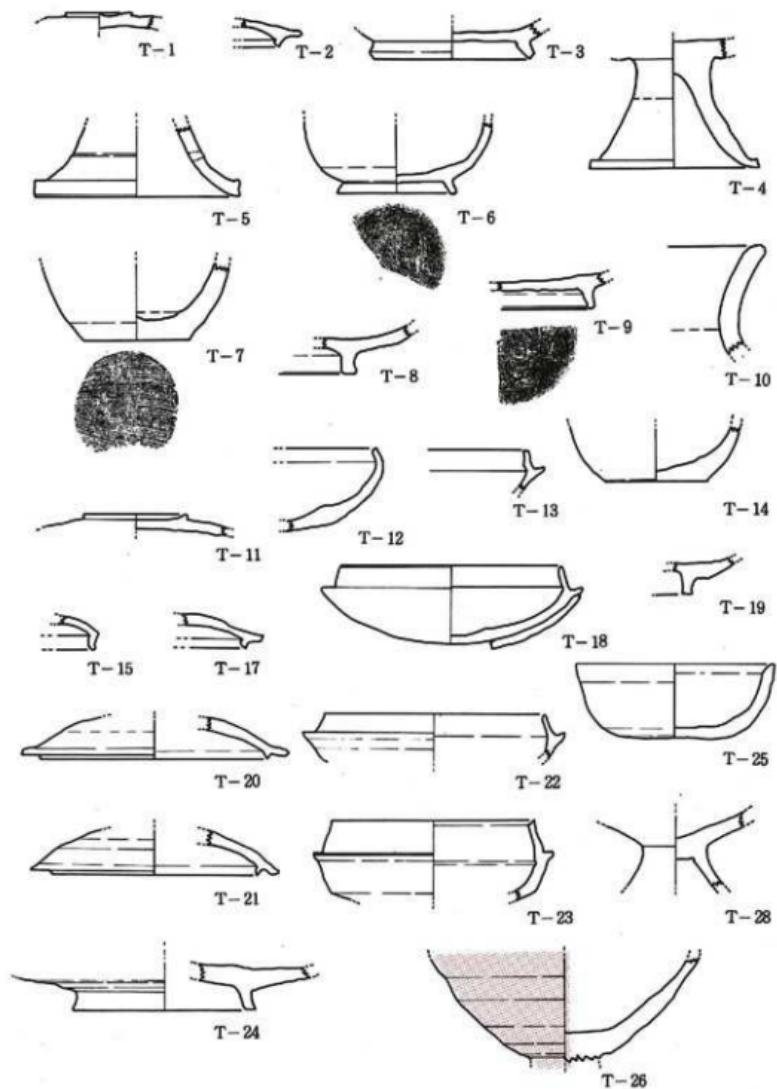
須恵器が殆どを占めるが、いずれも古墳時代後期～奈良時代頃と思われる。すべてのトレンチのいずれの層位からも遺物が検出されるが、その散布状況はおおよそA～Cトレンチでは10片前後、D及びEトレンチでは60片以上、F～Hトレンチでは20片前後、I～Mトレンチでは10片前後となっている。以下に代表的なものを記載する。

T-1は輪状つまみを有する杯蓋の一部である。内外面とも摩滅が著しいが、つまみの外側に径6mmの3つの円形竹管文の押形が施されている。T-2は擬宝珠状のつまみを有する杯蓋の一部と思われる。T-3は大型の壺か高台付壺の底部片と見られる。底部外面にはろくろによるミズヒキ形成の跡がみられるので、形成後高台を貼付けたものであろう。胎土に1～3mmの黒色砂粒を含有する。T-4は高杯脚部片である。欠損が多く断定できないが、二方透かしの可能性が大きい。断面はやや摩滅している。T-5は高杯脚部の一部である。断面に一部透かし痕が残っており、二方透かしと思われる。T-6は高台付壺の残片で底部に薄く静止糸切り痕を残している。T-7は壺の底部と思われる。底部外面

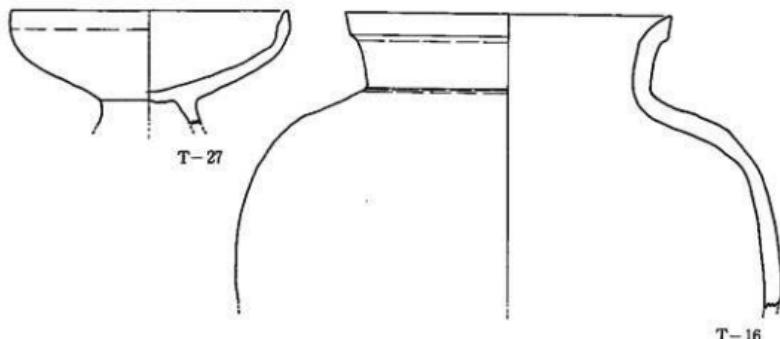




第4図 鈴田遺跡トレンチ断面図(2)



第5図 伊田遺跡出土遺物実測図(1) 1/2



第6図 鈴田遺跡出土遺物実測図(2) 1/4

に静止糸切り痕を明瞭に残している。胎土も密で焼成も良好であるが整形は極めて荒い。T-8・24は高台の付いた壺か壺の底部片で、高さのあるしっかりした高台である。焼成も良い。T-9は同じく高台付壺の底部片であるが、底部外面にわずかに静止糸切り痕を残している。T-10は土師質の壺か壺の口縁の一部と思われる。単純な口縁で焼成もやや悪い。T-11は輪状つまみを有する壺蓋の一部で、荒い箝削り調整痕がある。摩滅が著しい。T-12は壺身の一部で胎土中に1~3mmの黒色砂粒を含有する。外面の調整は口縁部のみミズヒキ調整で底部にいくにしたがい箝切り調整痕が明瞭となる。T-13は壺身の一部で口縁形態から古墳時代後期に属するものと思われる。T-14は壺か壺身の底部片で底部外面に静止糸切り痕がある。T-15は壺蓋の口縁端の一部である。焼成も良好である。T-16は土師器の壺の口縁部で完形である。口径15cmを計る。一部に黒く焼成痕があるが、焼成は良好で胎土も密である。頸部から胴部にかけて、かき日状の沈線が施されている。T-17は壺蓋の一部である。擬宝珠状のつまみを有すると思われる。T-18・22は壺身の一部で径11.8cmと11.6cmを計る。T-18の外面には自然釉があるほか、重ね焼きの際に付着したと思われる同種の壺身片が融着している。T-19は高台付壺の一部と思われる。外面には荒い箝削り調整が施されている。T-20・21はそれぞれ口径14.2cmと13.2cmを計る。いずれもかえりを付ける壺蓋の口縁部片である。T-23は壺身の口縁部片で、全体の5分の1が残存する。受部の立ち上がり高は1.2cmあり、やや内傾しながら立ち上がり口縁端部ではほぼ垂直となる。口縁端部は鋭いのみ刃状を呈し調整も丁寧である。他の須恵器片とは時期的に古いものと思われるが、この他には出土しなかった。T-25は平底に近い壺身で口径10.6cm、器高4.0cmを計る。T-26・27は大型の高壺の壺部片、T-28は脚類部の破片である。

4. 小 結

本遺跡は、当初の踏査では須恵器・土師器の散布地であると同時に「鉢田」という小字名に示された製鉄関連遺跡（鉢跡）ではないかと推定していた。

発掘調査の結果によても、水田耕作土の直下に鉄滓と思われる多量の資料を検出し、また遺物も古墳時代の須恵器・土師器に限られることから、あるいは奈良時代以前の生産遺跡とも考えられた。各トレンチの下層で検出された疊層は、摩滅した須恵器が多く発見されたことから河川敷か河床ではなかったと考えられ、遺構が全く発見されなかつたのはこうした理由によるものと思われる。

これら鉄滓状の資料を日立金属安来工場で分析を依頼したところ、須恵器の窯壁の一部ではないかとの結論を得た。

大井・朝酌地区一帯は、古来より須恵器の生産地として知られている。また本遺跡の隣接地には、土器の胎土に適した良質の粘土が庶出する。

こうしたことから、本遺跡に近接して須恵器窯跡が存在することがかなりの確実性をもって推察される。また今後、須恵器窯の窯壁についても資料が提供され、比較分析の資料が増加することによって、遺跡性格判断に利用出来るものと期待される。

註

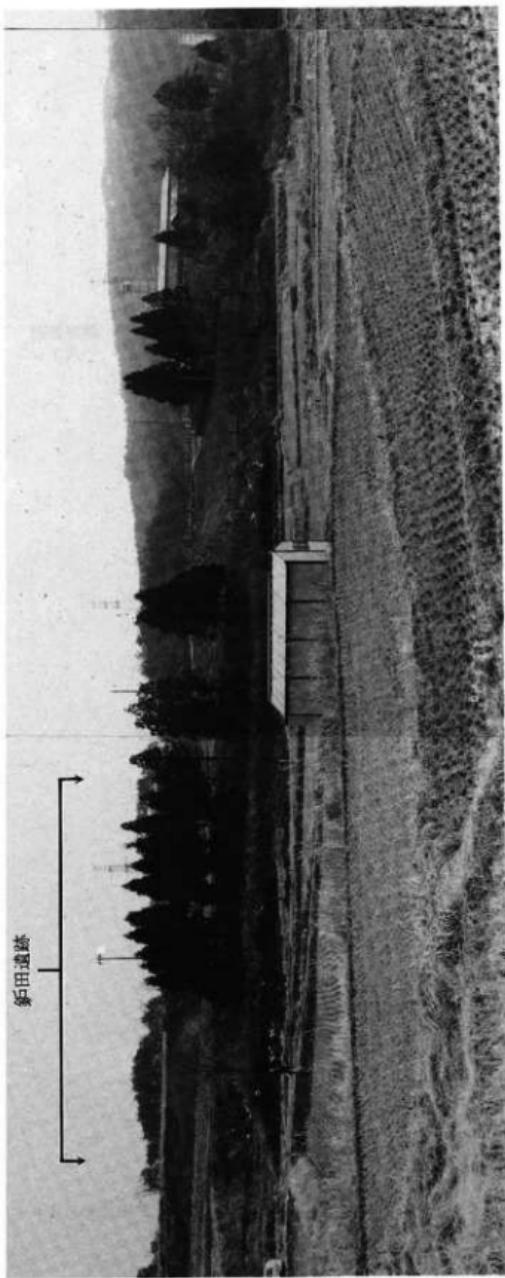
註1 本書第4章第4節を参照。

註2 島根大学教授 三浦清先生が現地踏査され指揮された。

第1表 鈴田遺跡遺物一覧表

番号	地区・層位	形態	口径cm	器高cm	備考
T-01	B・第2層暗褐色土	坏蓋(輪状つまみ)			輪状つまみのつまみ部分。
T-02	G・礫層上面	坏身			坏身の受部部分のみ。
T-03	B・第3層暗褐色土	高台付坏			高台部分のみ。
T-04	B・第3層暗褐色土	高坏(脚部)			脚部のみ。
T-05	D・第1層耕作土	高坏(脚部)			脚端部。
T-06	D・第1層耕作土	高台付坏			底部外面に静止糸切り痕。
T-07	D・E第2層	平底壺			底部外面に静止糸切り痕。
T-08	D・E第2層	高台付坏			高台部のみ。
T-09	D・E第2層	高台付坏			底部外面に静止糸切り痕あり。
T-10	D・E第2層	壺(土師質)			土師器の単純口縁の壺と思われる。
T-11	D・E第2層	坏蓋(輪状つまみ)			輪状つまみ部分が残存。
T-12	D・E第2層	坏身	9.8		
T-13	D・E第2層	坏身	10.4		
T-14	E・第1層・2層上面	平底壺			
T-15	E・第1層・2層上面	坏蓋			
T-16	F・礫層	壺	15.0		
T-17	B・第2層暗褐色土	坏蓋			
T-18	I・J	坏身	11.8	4.5	
T-19	K	高台付坏			
T-20	I・J暗褐色土	坏蓋(輪状つまみ)	14.2		返りの付く蓋と思われる。
T-21	F・東山側断面	坏蓋(輪状つまみ)	13.2		返りの付く蓋と思われる。
T-22	F・礫層上面	坏身	11.6		
T-23	F・礫層上面	坏身	10.8		
T-24	F・礫層上面	高台付坏			
T-25	F・礫層上面	坏身	10.6	4.0	
T-26	F・礫層上面	高坏(坏部)			
T-27	F・礫層上面	高坏(坏部)	14.4		
T-28	G・礫層上面	高坏(脚部)			

鈴木遺跡調査前の状況（西からみる）





芦田遺跡
A トレンチ鉄滓散布状況



芦田遺跡 B トレンチ (調査後)



伊田遺跡B トレンチ北壁



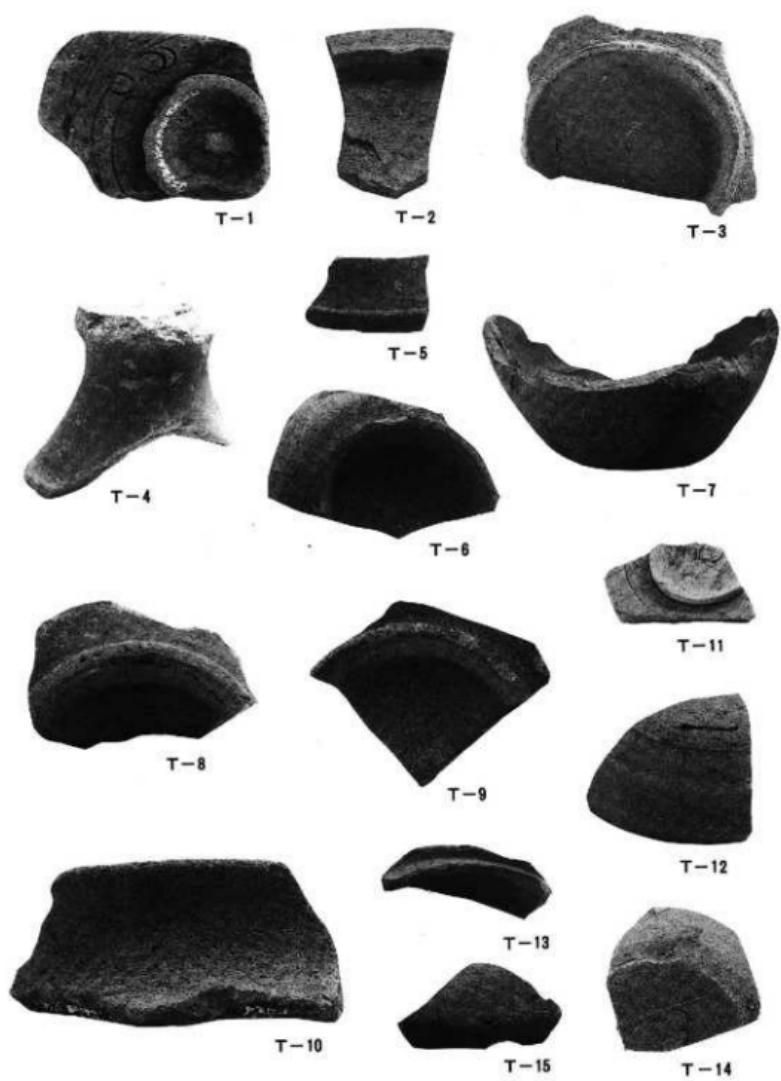
伊田遺跡E トレンチ



伊田遺跡 I トレンチ



伊田遺跡 J トレンチ



炉田遺跡出土遺物



T-16

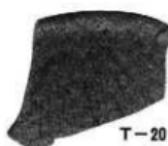


T-17

T-19



T-18



T-20



T-22



T-21



T-23



T-24



T-28



T-25



T-26



T-27

朝酌荒神谷遺跡

朝 酉 荒 神 谷 遺 跡

1. 調査に至る経緯

本遺跡は、松江市北東部の朝酉地区に所在する。松江市教育委員会が昭和59年度に調査を実施した鈴田遺跡の北東側の山裾に張り出した台地上に位置しており、当初の分布調査で須恵器が數片認められた。

このため、該当の畑地と茶畠に各々調査区を設定し、遺構と遺物の検出につとめることとした。

調査は、2箇所とも土層を確認するための畦を十文字に設けて4分割し、それぞれ南側を1区、2区、北側を3区、4区とした。

2. A 区

調査の概要について

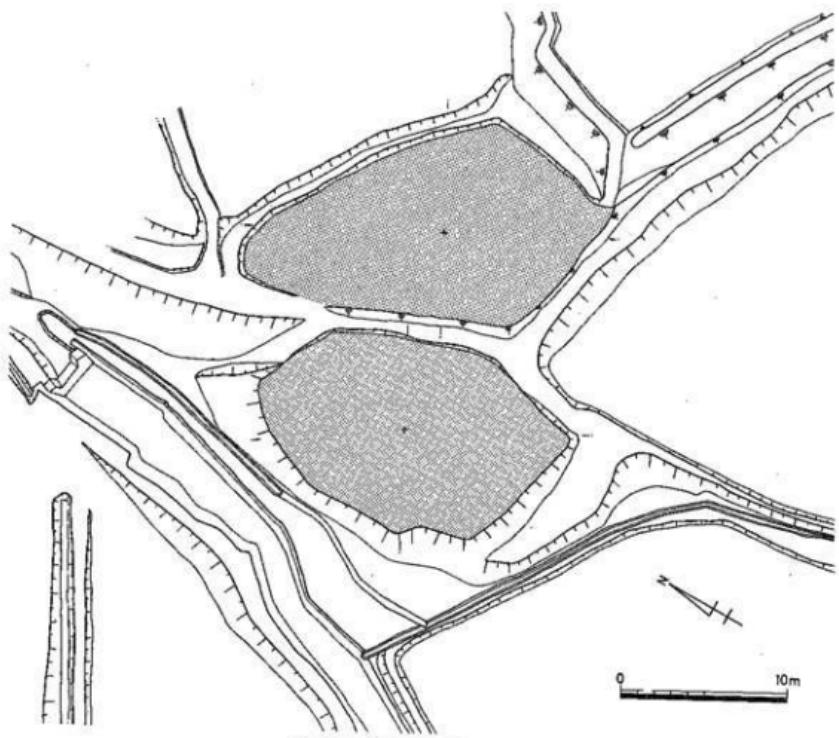
この調査区は幅1m余りの小道をはさんで畑の調査区に接している。畑側よりも一段高い位置にあり、茶の木が全面に植え込まれていた。このため、茶の木を除去したあと調査に入った。

耕作土以下、8~23cmで第2層の攪乱土に達する。耕作土中からは多数の須恵器片、土師器片が出土している。

第2層は、東側から西側にかけて長さ8m、厚み10~70cmで広がり、特に西端付近では深くなっている。南北方向で同層は、15~20cmで堆積し、特に1・2区で45~100cmの厚みを計る。

東西壁に見られる第4層黒灰色土層は、1区の東端から西へ3m、厚み5~10cmを計るが、一部が攪乱土の上にのった形で堆積していることからおそらく第2層とはほぼ同時期か、それ以降のものと考えられる。第5層明褐色土（炭混入）は第4層と同じ厚みで長さ4mを計る。

1・2区では第2層の最下層から、25~30cm大のものを中心とした大小の転石が多数検出された。攪乱土を除去したのち、第3層茶褐色土を確認し、同じ層位で第6層暗褐色土



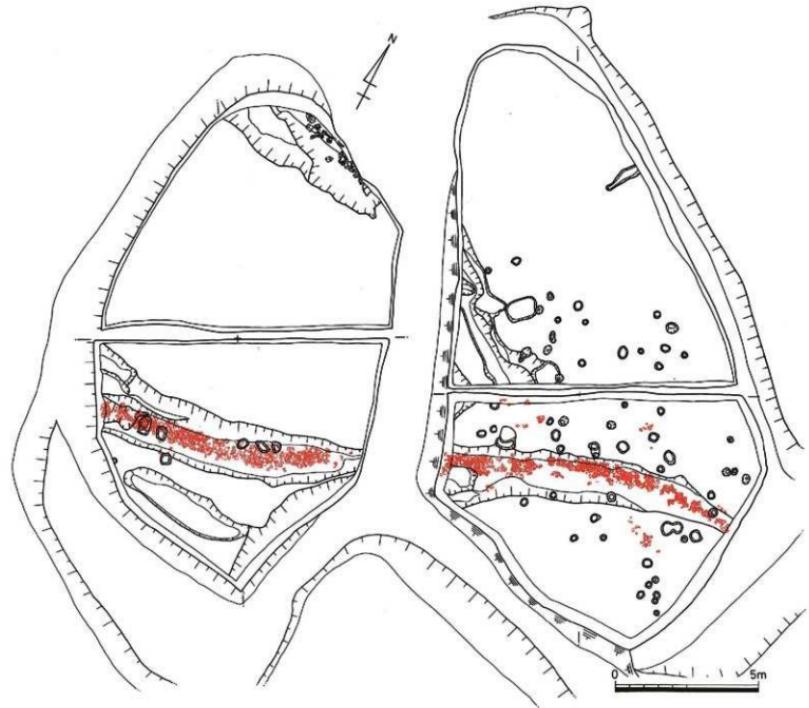
第1図 荒神谷遺跡調査平面図

を伴う石列溝を検出するに至った。第3層は東西方向で1区東端から長さ8m, 厚み12~45cmを計るが、2区に至って落ち込んでいる。又、南北方向では、3・4区北側半分で地山を、南側半分で第3層茶褐色土を確認した。さらに同層より、合計99個のピット、4つの溝状遺構を検出した。遺物は須恵質の环蓋や高台の一部などが出土していることから、遺構面は石列溝を伴う第3層であると考えられた。

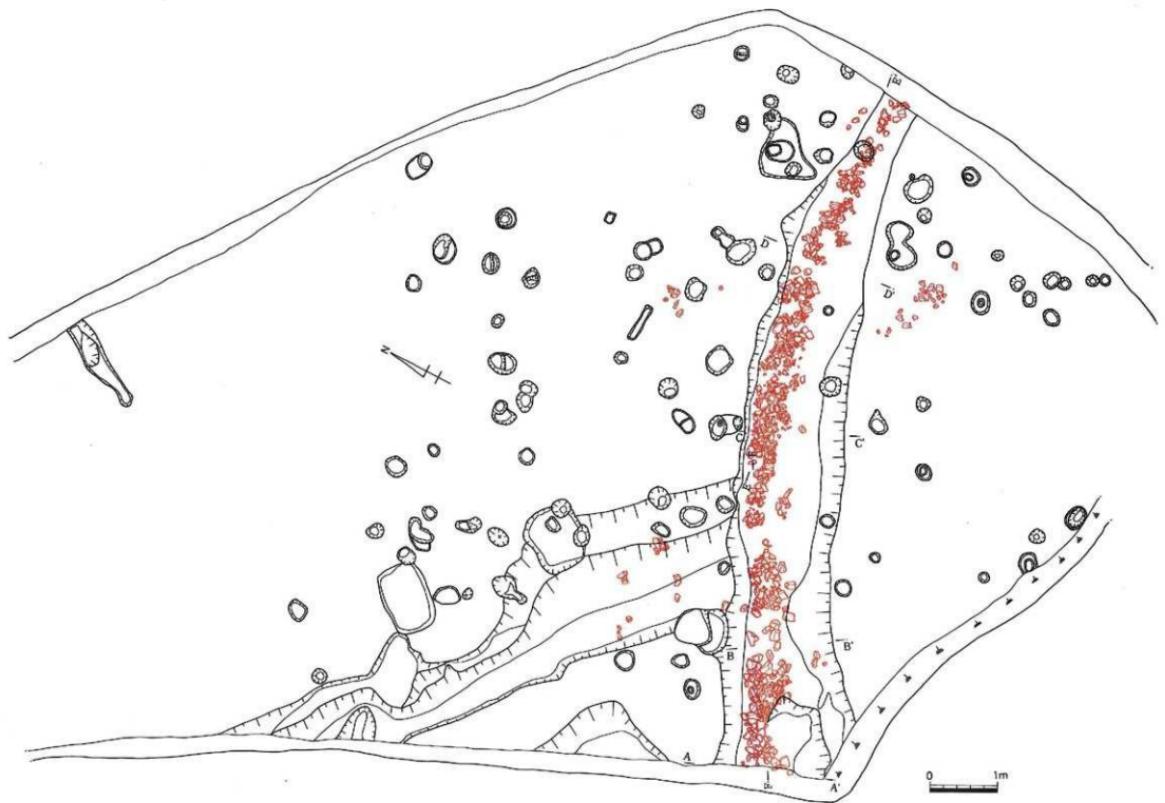
調査区は全体として、北側の平坦面が南にいくに従って、緩やかに傾斜し、さらに2区の西端で一段と深く落ち込んでいる。

遺構について

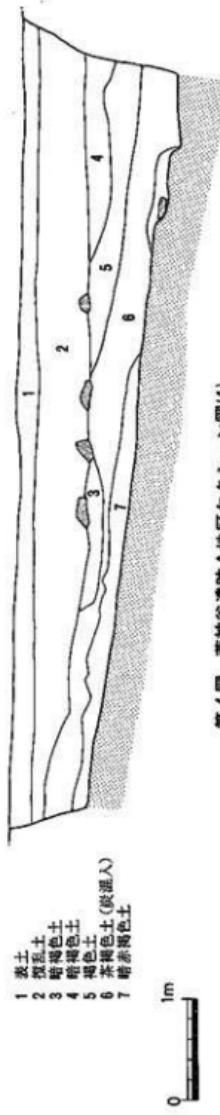
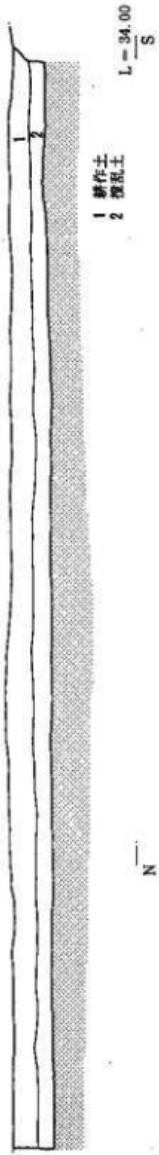
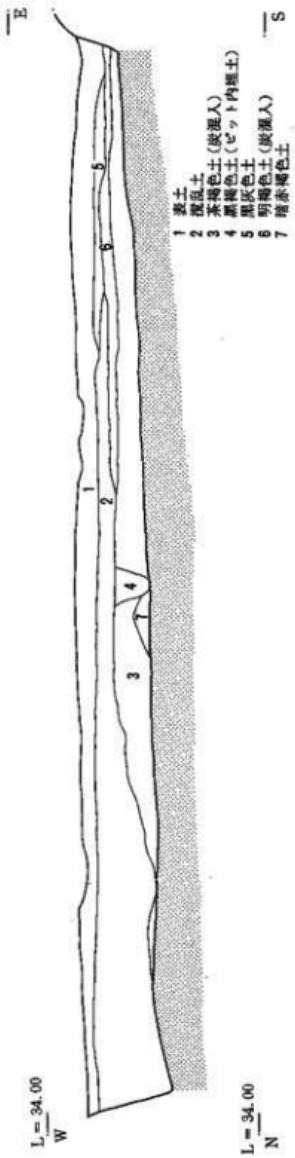
石列を伴う溝 1区から2区のはば中央をゆるやかなカーブを描いて東から西に伸びるこ



第2図 芽神谷遺跡調査成果図

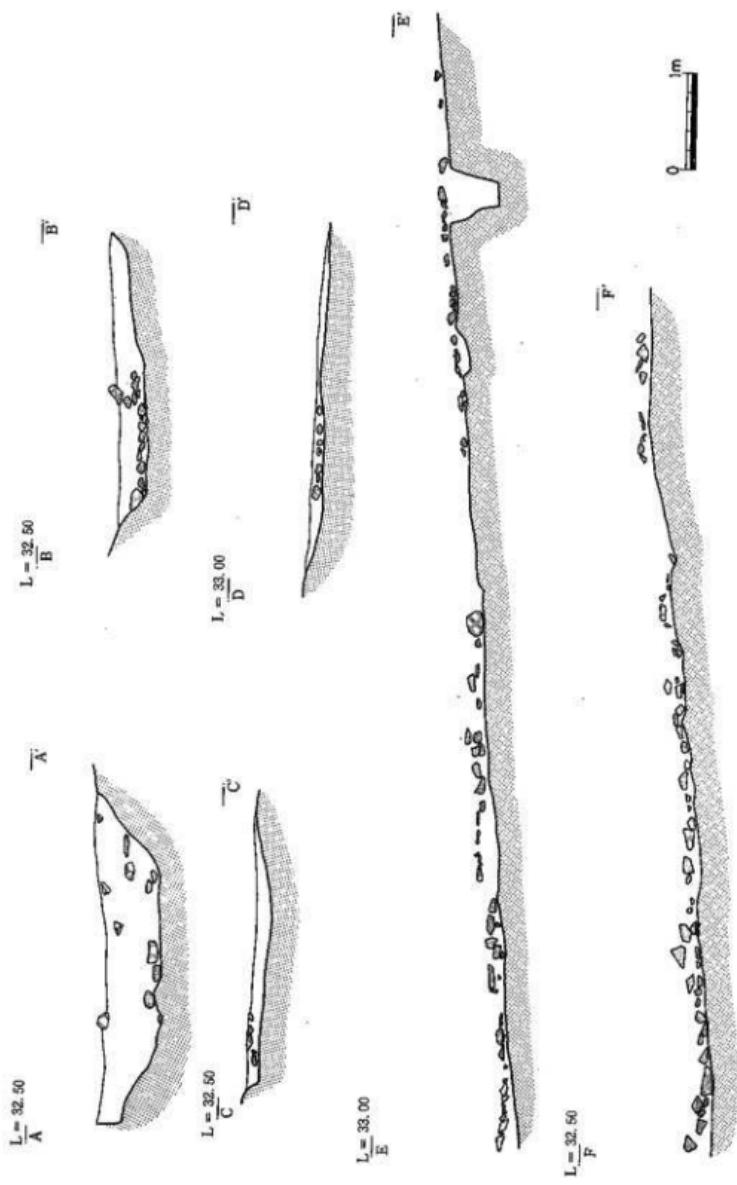


第3図 荒神谷遺跡A地区遺跡平面図



第4図 充神谷遺跡A地区セクション図(1)

第5図 荒神谷道路A地区セクション図(2)



の溝は、1区（第5図C-C'）東側で幅0.85m、堆積する暗褐色土の厚み数cmで溝の肩も判然としない状態で始まっている。しかし、1区（第5図B-B'）西側で断面が台形状を呈し、上端幅1.2~1.5m、下端幅1.0~1.1m、堆積土の厚み3~8cmを計り、2区（第5図A-A'）で上端幅1.5m、下端幅0.6~0.8m、堆積土の厚み10~15cm、西端では上端幅1.7m、下端幅1.1~1.3m、堆積土の厚み15~30cmを計るに至った。溝内の堆積土は暗褐色のみである。溝内からは先の畠の調査区と同様に10~20cm大のものを中心として、大小の石が溝底部に接する形で検出された。石間からは、須恵器、土師器片が出土している。

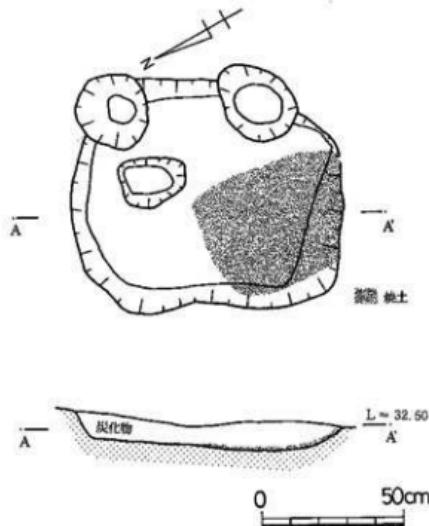
土壤

SK-01（3区） 当初、平面プランは椭円形の土壤として第3層茶褐色土面で認められたが、掘り下げの段階で多量の炭化物を検出したため、さらに精査を行った。その結果、壁及び床面から焼土が検出された。平面プラン椭円形。上端幅95×75cm、下端幅75×60cm、深さ7×10cm。炭化物が7~10cmの厚みで堆積しており、焼土は西側の一部で固く焼きしまっていた。この焼土は3つの茶褐色土の埋土を伴うピットに切られている。

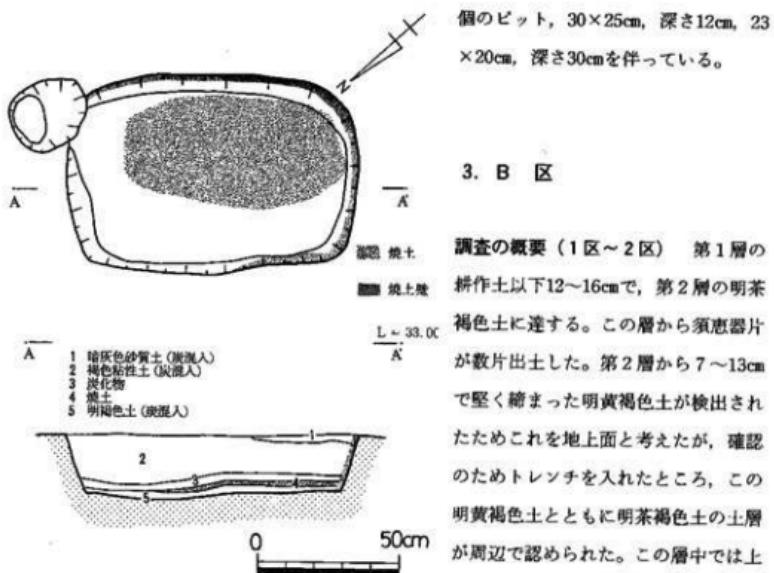
SK-02（3区） 第3層茶褐色土から検出された平面プラン長方形。上端幅1×0.75m、深さ20~23cm。埋土は褐色粘性土（炭混入）である。壁面は北側の一部を除いて固く焼きしまっており、底部には2~3cmの厚みで、炭化物が堆積している。床面には、遺物はなかった。

SK-03（4区） 地山面から検出された黒褐色土を埋土とする長細い土壤である。長さ1.45m、幅0.35m、深さ14~18cmを計る。精査したが遺物はなく、性格は不明である。

SK-04（1区） 80×80cm、深さ5~7cmの不整形な土壤である。土器片が出土した。黒褐色土を埋土とする2



第6図 SK-01実測図



第7図 SK-02 実測図

考えられた。この層は大小の灰白色ブロックを含んでおり、畑地中央から南部にかけて、次第に厚みを増しながら（5~85cm）幅6mにわたって堆積していた。遺物は須恵器片や土師器片が若干出土した。

地山を成す明茶褐色土は、中央から南部にかけて、0.2~1.1mの堆積土を伴って緩やかに傾斜しており、溝状の石列遺構は1区から2区にわたって、その中央付近では東西方向に伸びていた。溝内の堆積土は上下2層にわかれしており、1区から2区にかけてほぼ東西方向に緩やかに傾斜しながら堆積していた。上層は明茶褐色土で幅1m~2m、長さ9m、厚み30~70cmを計る。層中からは土製支脚の一部、須恵器の甕片、須恵質の土馬の胴部等が出土した。下層は茶褐色土で、厚み25~35cmを計る。この層からは溝にともなうと思われる多量の石が検出された。耕作土から溝の床面までは80cmを計る。

（3区~4区） 第1層耕作土以下10~20cmで第2層の明茶褐色土に達した。第2層から5~17cmで地山面を検出した。4区の北側で地山が急に落ち込んでい他は1・2区の石列に伴う遺構は検出出来なかった。

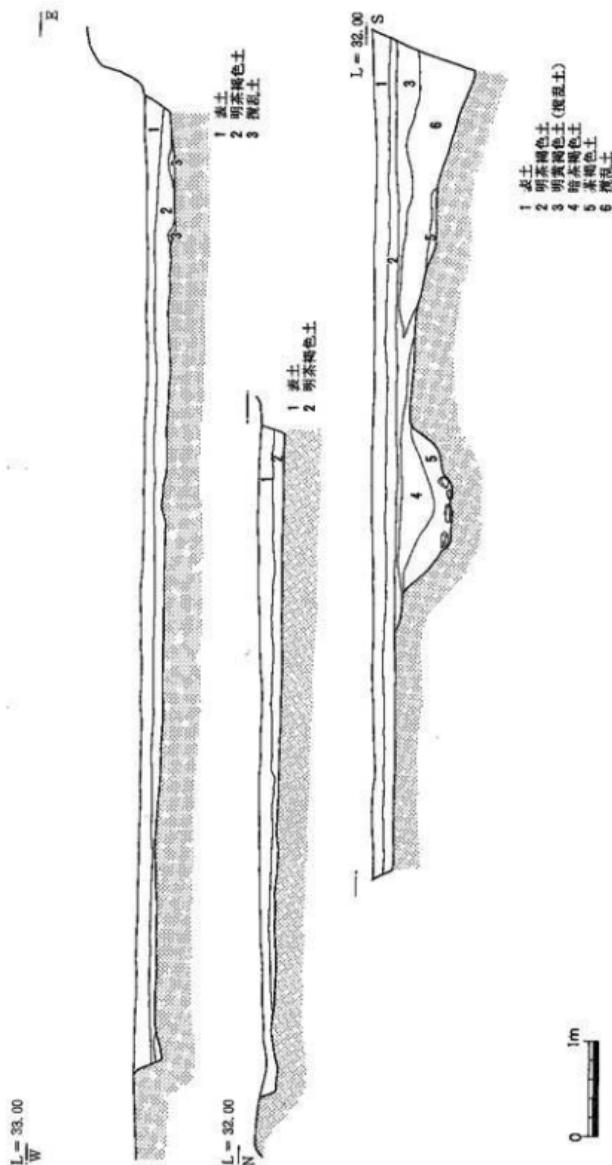
個のピット、30×25cm、深さ12cm、23×20cm、深さ30cmを伴っている。

3. B 区

調査の概要（1区~2区） 第1層の耕作土以下12~16cmで、第2層の明茶褐色土に達する。この層から須恵器片が数片出土した。第2層から7~13cmで堅く締まった明黄褐色土が検出されたためこれを地上面と考えたが、確認のためトレンチを入れたところ、この明黄褐色土とともに明茶褐色土の土層が周辺で認められた。この層中では上端に石列を伴う溝を検出したため、この明黄褐色土は後世の搅乱土であると

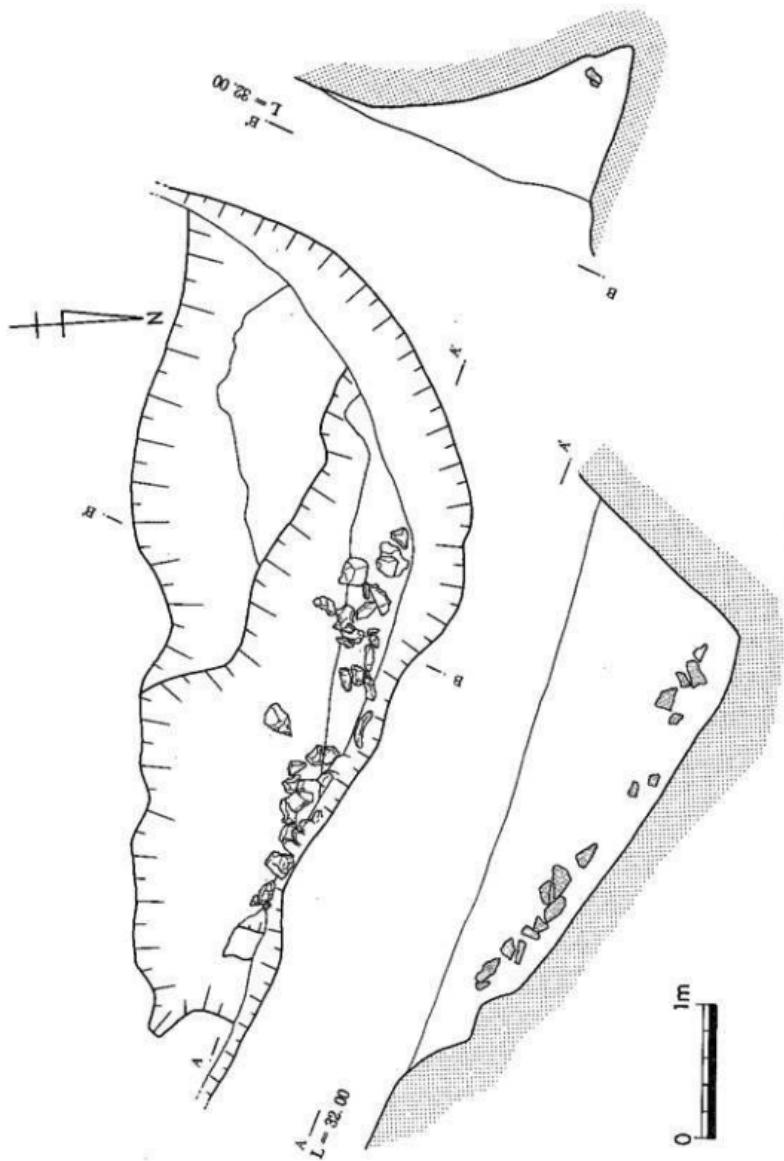
第8圖 B地區帶狀遺跡圖





第9図 B地区セクション図

第10図 B地区第4区実測図



石列を伴う溝について 溝は第1区から第2区にかけてその中央をほぼ東西方向に走っている。長さ約9m、上端幅0.8~1.9m、下端幅0.2~1.2m、深さ20~50cmを計る。東側では浅く、細くなっているものの、まだ終息してはいない。全体として1区から2区に向かって緩やかに傾斜し、2区の西端で一段深く落ち込んでいるのが認められた。

溝内から検出された石列は、20×15cm大のものを中心に大小の礫からなっていた。

溝の埋土は2層にわかれ、上層は暗茶褐色土で、須恵器の土馬の胴部（2区）や土製支脚の一部、須恵器の甕片をはじめ須恵器・土師器片が出土している。下層は茶褐色土で石と小量の須恵器片を包含している。遺物は完形あるいはそれに近い形で出土したもののがなかった。

石列を除去したあと、溝の底面に大小9箇所の窪みを検出したが、いずれも深さ4~8cmのものであり、特に遺構とは認められなかった。

遺物について 耕作土下の第2層からは、須恵器、土師器片が出土している。第3層は擾乱土であったので、特に遺物は無かった。

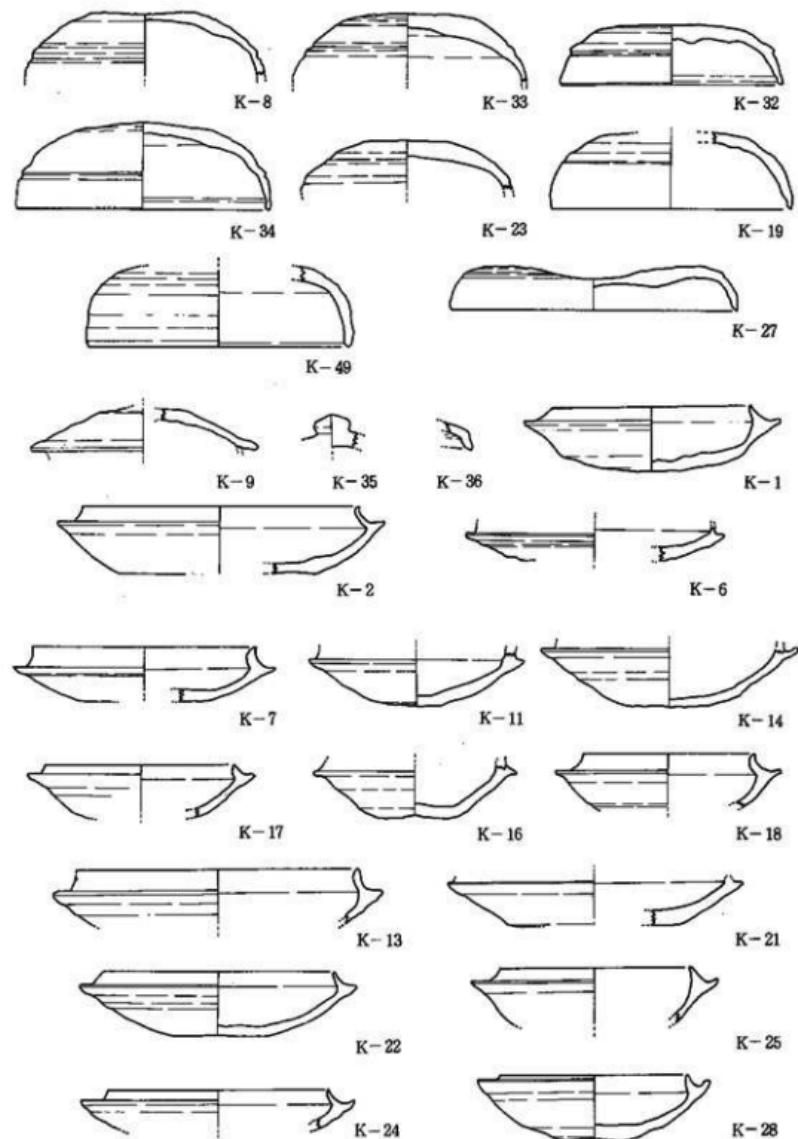
石列溝内の堆積土の上層では、須恵器の土馬の胴部や土製支脚、須恵器の甕片が出土した。下層からは、石間から、須恵器片が少量認められた。出土した遺物は完形あるいはそれに近い形のものではなく破片であった。

これらの中には、須恵質の蓋杯、高台杯の碗、高杯、甕、上製支脚が認められる。

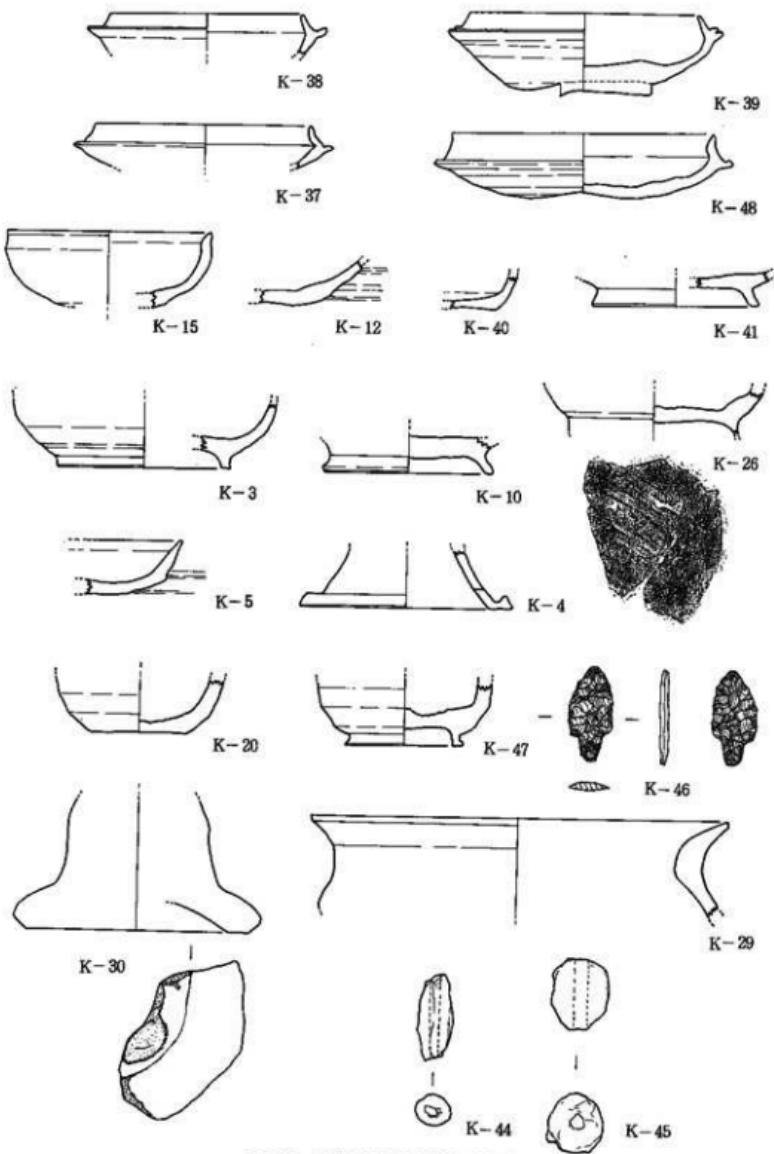
時期については、蓋杯の身の一部が山本編年のⅢ期頃のものである他は判別ができなかつた。

4. 遺物について

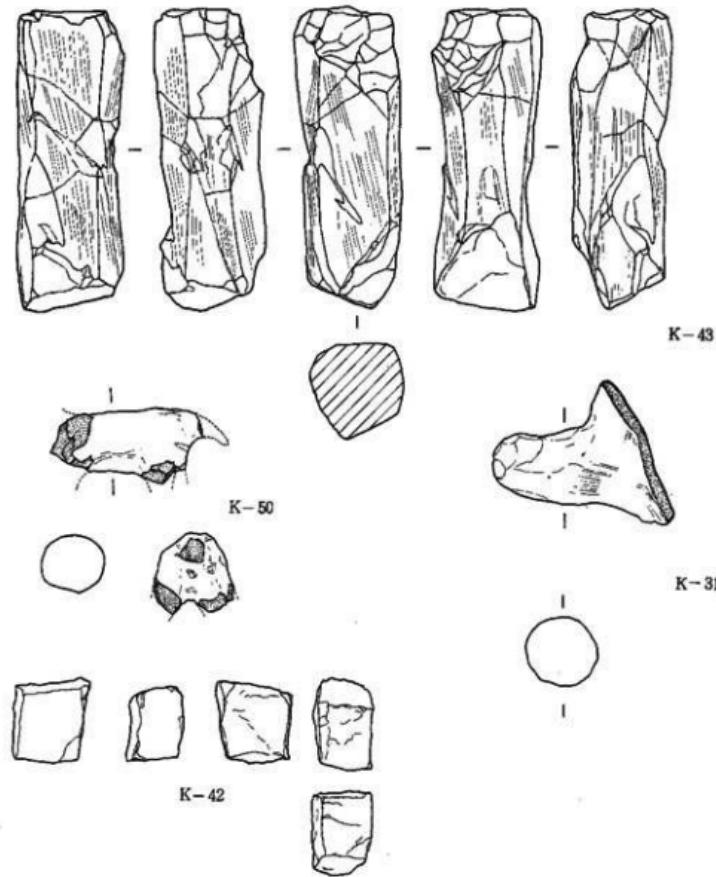
杯蓋 つまみを持たない杯蓋はK-8・19・23・27・32・33・34・49の8個体が実測可能であった。K-32はA-1区第2層のピット内から出土。口径11.7cm、高さ3.2cmを計る。3分の1が現存する。全体にひずみが激しい。口唇部はやや肥厚し、内面に1条の沈線を施す。内面には気泡がある。色調は灰色で胎土は密である。焼成は良好である。K-33はA-2区第2層から出土。口唇部は破損している。天井部はやや平坦で凸部はかなり退化して鈍くなっている。凸部の上下に不明瞭な沈線を施す。色調は外面の4分の3が黒灰色、4分の1が灰色、内側は淡青灰色である。胎土は1mm前後の白、黒色砂粒を含む。K-34



第11図 荒神谷遺跡遺物実測図(1) 1/2



第12図 荒神谷遺跡遺物実測図(2) ½



第13図 荒神谷遺跡遺物実測図(3) 1/2

はA-2区第3層から出土した。口径13.3cm、高さ4.6cmを計る。口唇部は3分の1が現存する。口唇部はやや肥厚し、内側に1条の沈線を施す。色調は淡い灰色で胎土はやや密、焼成も良い。

つまみを有する杯蓋類はK-9・35・36である。K-9は天井部に擬宝珠つまみの痕跡を残すものである。K-35は擬宝珠つまみで、A-2区石列溝内の床面から出土した。K-36はA-2区石列溝内床面から出土。口縁端部しか残存しないため、法量は不明。内側

にかえりがつかず杯蓋の口縁端部がななめ方向に折れ曲がる。

杯身 受部を有する杯身片のうち実測可能であったものを第11・12図に示した。K-2は推定口径14.6cm、高さ3.6cmを計る。K-7は口径11.8cmを計る。いずれも口縁部のみの破片である。立ち上がりは内傾し口縁端部でわずかに垂直となるもの。K-17・18はA-1区の地山面から出土したもの。口径はそれぞれ9.8cmと9.0cmを計り小型の杯身である。K-37はA-2区第1層下面より出土。たちあがり部、受け部のみ現存。推定の口径10cm、たちあがりの高さ9mmを計る。色調は灰色、焼成は良好で、胎土に0.5~2mmの白色砂粒を少量含む。K-38はA-2区第3層中のものである。杯身のたちあがり部、受け部のみ現存。色調は緑灰色、胎土は良好で密である。K-39はA-2区第3層から出土した。ほぼ完形である。口径12cm、たちあがりの高さ12cmを計る。色調は外側が灰褐色で自然釉が付着し、内側が薄い青灰色。焼成は良好で胎土に5~8mmの大白色、黒色の砂粒を多量に含む。底部外面に5cm大の蓋の天井部が付着しており、重ね焼き痕が認められる。K-15は口縁端部が外方へくびれるもので、口径10.6cmを計る。A-2区で地山面からやや浮いた状態で出土している。K-12は底平の杯になるものと思われる。K-40はA-2区のピットから出土したもので高台部のみ残存。

高台付杯 K-40はA-2区のピット内から出土。高台部のみ現存。高台は貼り付けたものの。色調は暗灰色から灰色。胎土は0.5~1mmの白色砂粒を含む。焼成は良好である。K-41はA-2区石列溝内床面から出土。高台がつかず、底部からななめ上方へたちあがる。底部には丁寧な回転なでを施す。K-26はA-2区第3層中より出土したもの。底部外面にかすかに糸切り痕跡が認められる。

その他の遺物 K-31は土師器把手でA-1区第2層から出土した。器種は不明。肌色の上にすす状の黒斑が全体に付着している。胎土には0.5~1mm程の砂粒を多量に含む。焼成は良好である。部分的にハケ目が残る。K-42・43は磁石でA-2区第1層下面から出土した。K-43は黄灰色の火成岩製で長さ11.4cm、幅3.5cm、厚み3.6cmを計る。5面にわたって使用痕が残る。K-46は石鐵(有舌尖頭器)でA-1区第2層で検出した。黒曜石製の石鐵で、最大長3.5cm、最大幅1.6cm、厚み0.3cmを計る。K-50は須恵質の土馬である。B-2区第4層から出土。灰色で硬質の胸部のみである。頭部から頸部・尾・脚部は欠損しており、雌雄の区別はなく、肛門部のみを認める。現存する長さ8cm、胸部径3.0cmである。K-44・45は上鍤と思われる。K-44は長さ4.5cm、幅1.8cmの縦長のもの、K-45は直径3cmの球形のもので、それぞれ中央に4.5mm~6mmの円孔を穿つ。

5. 小 結

今回の調査においては、調査面積が狭かったこともあり、遺跡全体の性格まで結論づけることはできないが、個々の造構については石列をともなう溝状の造構、99個のピット群、土こう状造構4を検出することができた。これらに基づき若干の考察を行いたい。

1) 石列溝

石列溝は、第3層（茶褐色土層）より掘り込まれていた。この第3層からは山本清先生の須恵器編年Ⅱ期の土器が出土していることから、溝の時期はそれ以降と考えられた。溝内の石列のはほとんどは溝底部に接しているため溝にともなうものであると思われ、溝底部の石間より出土した一番新しい時期の土器片からみて、築造時期は7世紀後～8世紀中頃と推定される。

石列溝は、設定調査区内で東から西へゆるくS字状にカーブしながら縱断し、さらに断層が東西それぞれにのびると考えられる。台形に掘り込まれ底部に石を敷つめたようすから、排水溝または川道として利用された可能性もある。

ピットは、畑区では検出されず、茶畠区のみからの検出であった。

2) ピット群

ピットは最大のもので径40cmを計り、全体的に小さいが、ピットに柱痕跡の認められるものがあることや、その数からみて、小規模な建物があったと考えられる。しかし、今回の調査では建物を復元することができなかった。

ピット内の埋土からみて、3～4の時期に分類することができると思われるが、時期について、細片の上器しかないためはっきりとわからない。しかし、層位関係からみて、ピットは第3層面から掘り込まれていることから前述の山本編年Ⅳ期以降の築造だと考えられる。これらのピット群と石列溝との関連は褐色土のピットは溝の埋土から掘り込んでいたため溝より下る時期のものであるが、その他のピットについては、溝との直接の切り合いか認められないため、前後関係はわからない。

3) 土壌

SK-04、03は、その規模が上端幅でいずれも1mに近いか、それ以上あり、他のピッ

ト群よりも大きいため土壤とみなしたが、さほど深くもなく遺物も出土しなかったためその性格は不明である。

SK-01および02については、壁面の一部や底面が固く、焼きしまり埋土にも多量の炭化物を含んでいた。

周囲のピット群との関連から、建物にともなう炉の様な役割をしていたものと考えられるが、家屋の復元ができなかったので、家炉か外炉かはっきりしなかった。

4) その他

特異な遺物として、畠区内の溝埋土より土馬が出土したが上層からの出土であるため、溝の時期よりも下がった頃のものと考えられる。同層からは、上製支脚の破片も出土している。

以上の状況から考え合わせ、この地で小規模な建物が建てられ、そこで生活をした様な状況も想定できるが、出土した土器の数も少なく、建物群のはっきりした時期やその性格および、溝状遺構との関わりまでを知るには至らなかった。只、ある時期には、土馬という特殊な遺物が出土したことから考え、祭祠的な性格をもった建物もあったのではないかと考えられる。

第1表 荒神谷遺跡遺物一覧表

番号	地区・層位	形態	口径cm	器高cm	備考
K-01	A-1区第3層茶褐色土	环身	10.4	3.4	
K-02	A-1区第2層暗茶褐色土	环身	14.6	3.6	
K-03	A-2区地山より一層上	高台付环			
K-04	A-1・2区间畦第2層	高环(脚部)			
K-05	A-1区第3層	高环(环部)			
K-06	A-1区第2層	环身			
K-07	A-1区第2層暗黄褐色土	环身	11.8		
K-08	A1区第3層暗褐色土下面	环蓋			
K-09	A1区第3層茶褐色土下層	环蓋			
K-10	A-1区第3層茶褐色土	高台付环			
K-11	A-1区第3層・第4層	环身			
K-12	A-1区第3層	环身			
K-13	A-1区第2層暗黄褐色土	环身	14.8		

番号	地区・層位	形態	口径cm	器高cm	備考
K-14	A-2区第3層搅乱土	环身			
K-15	A-2区地山より一層上	环身	10.6		端部がくびれるもの。
K-16	A-1区第3層	环身			
K-17	A-1区地山の一層上	环身	9.8		
K-18	A-1区地山の一層上	环身	9.0		
K-19	A-2区ピット内	环蓋	12.6		
K-20	A-2区第3層搅乱土	平底壺			
K-21	A-2区第3層搅乱土	环身			
K-22	A-1区第3層暗褐色土	环身	12.0	3.4	
K-23	A-3区・4区	环蓋			
K-24	A-2区ピット内	环身	11.6		
K-25	A-2区第3層搅乱土	环身	10.0		
K-26	A-2区第3層	高台付环			
K-27	A-1区第4層暗赤褐色土	环蓋	14.9		
K-28	A-1区第2層暗黃褐色土	环身	10.0	3.5	
K-29	A-2区第3層搅乱土	甕(口縁部)	21.8		土師質。
K-30	A-1区第3層暗褐色土下面	土製支脚			土師質。
K-31	A-1区第2層	把手			土師質。
K-32	A-1区第2層 Pit	环蓋	11.8	3.2	
K-33	A-2区第3層	环蓋			
K-34	A-2区第3層搅乱土	环蓋	13.4	4.6	
K-35	A-2区石列	坏蓋(幾宝珠つまみ)			つまみ部分のみ。
K-36	A-2区石列	环蓋			返りのつかないもの(口縁部のみ)。
K-37	A-2区第3層	环身	11.2		
K-38	A-2区第1層下面	环身	12.6		
K-39	A-2区第3層	环身	12.0	4.1	
K-40	A-2区石列内	平底壺			
K-41	A-2区ピット内	高台付环			
K-42	A-1区第4層暗赤褐色土	砥石			
K-43	A-2区第1層下面	砥石			5面に使用痕あり。
K-44	A-1区第2層暗黃褐色土	土鍤			
K-45	A-2区第3層搅乱土	土鍤			

番号	地区・層位	形態	口径cm	器高cm	備考
K-46	A-1区第3層茶褐色土	石鏡			
K-47	B-2区墓壙中	高台付長頸壺			
K-48	B-2区第3層擾乱土	坏身	13.8		
K-49	B-2区第3層擾乱土	坏蓋	13.8		
K-50	B-2区	土馬			

荒神谷遺跡A区
調査前の状況



荒神谷遺跡A-1・2区
溝状構造及びピット群





荒神谷遺跡 A-1・2 区南北セクション（西から）



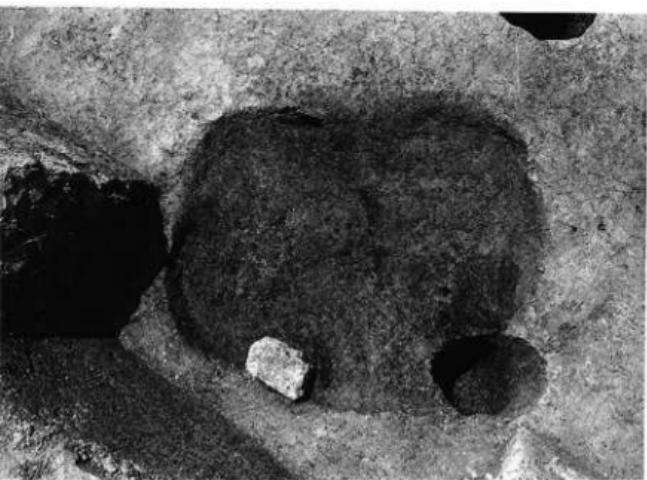
荒神谷遺跡A-3・4区南北セクション（西から）



荒神谷遺跡A-3・4区
全景（東から）



荒神谷遺跡A-3・4区
全景（北から）



荒神谷遺跡A-3区
SK-01①



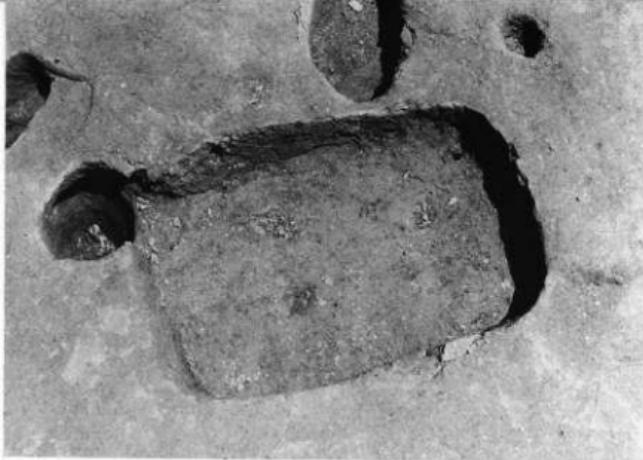
荒神谷遺跡A-3区
SK-01②



荒神谷遺跡A-3区
SK-01③



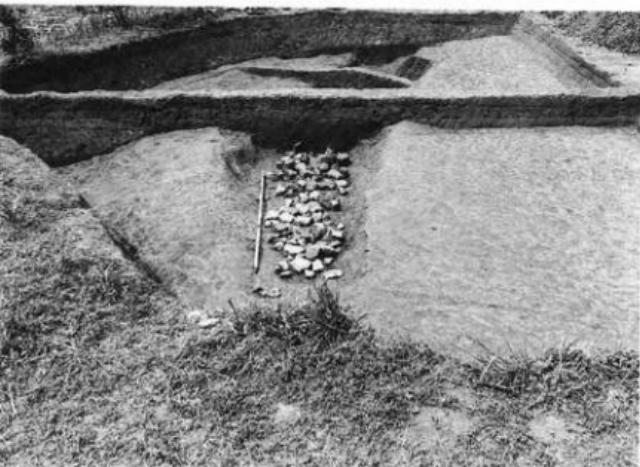
荒神谷遺跡A-3区
SK-02①



荒神谷遺跡 A - 3 区
SK - 02 ②



荒神谷遺跡 B 区
調査前の状況



荒神谷遺跡 B - 1 区
全景（西から）



荒神谷遺跡B-1・2区
全景(東から)



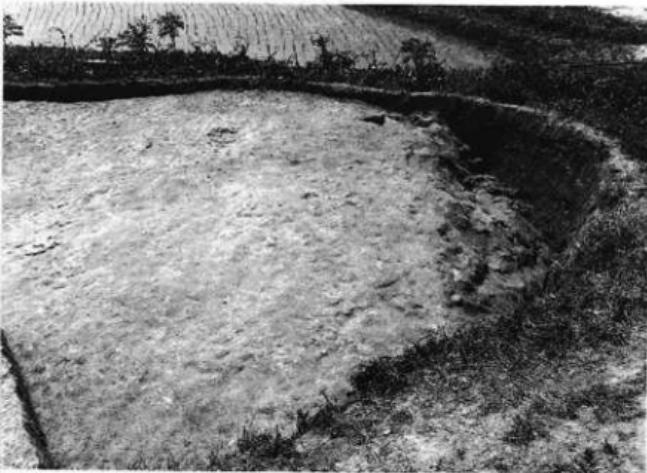
荒神谷遺跡B-1・2区
溝状遺構



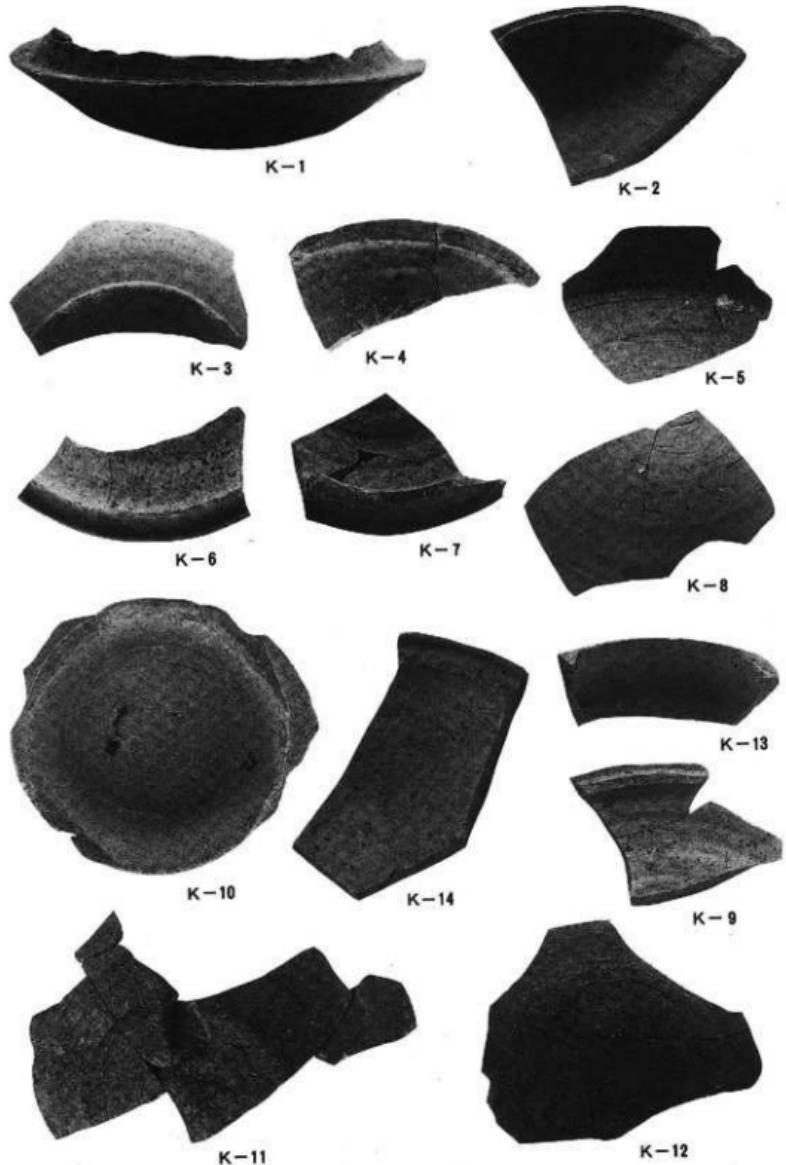
荒神谷遺跡B-2区
土馬出土状況①



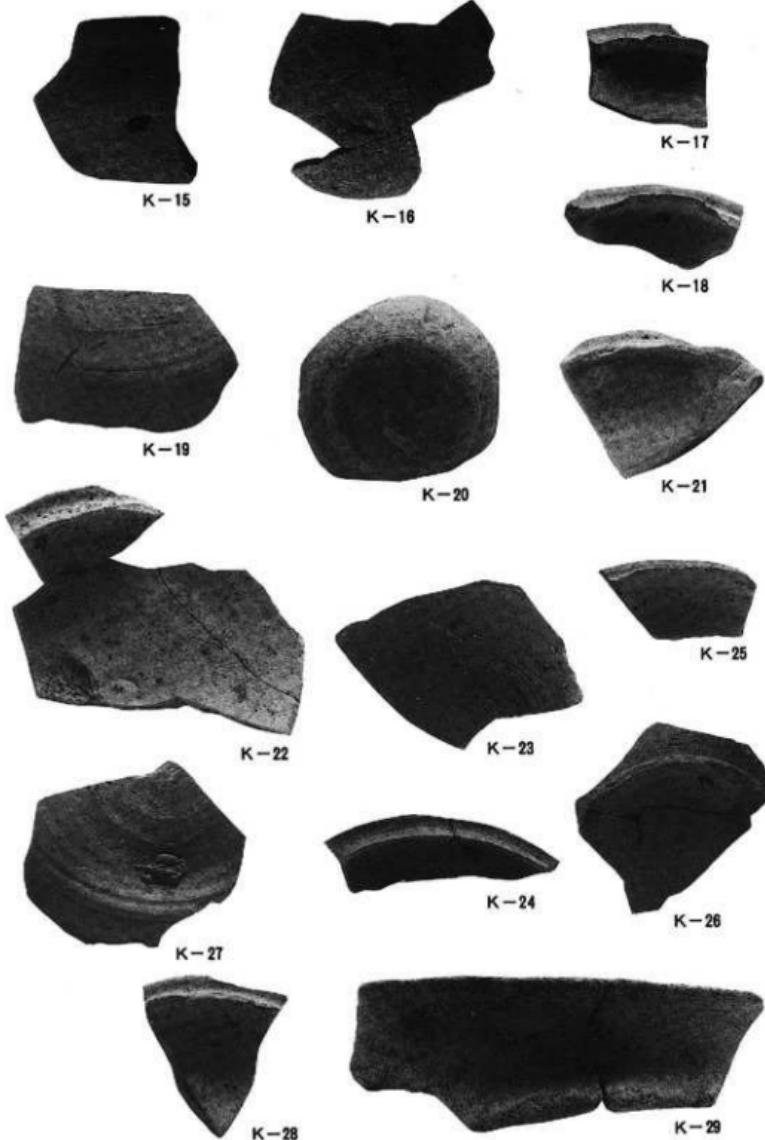
荒神谷遺跡B-2区
土馬出土状況②



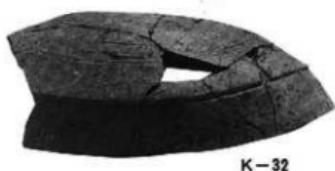
荒神谷遺跡B-3・4区
全景(調査終了時)



荒神谷遺跡出土遺物



荒神谷遺跡出土遺物



荒神谷遺跡出土遺物



K-42



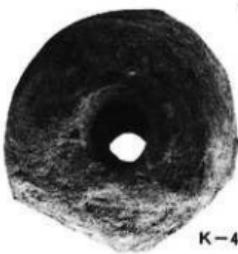
K-43



K-46



K-44



K-45



K-47



K-48



K-50



K-49



イ ガ ラ ビ 遺 跡

イガラビ遺跡

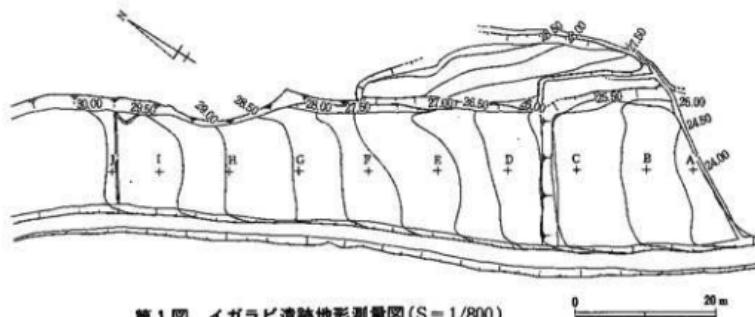
1. 調査に至る経緯

本遺跡は、大井神社の北側に位置する北西から南東に細長く伸びる谷間の東方入り口に立地している。標高は24~30mを測り、以前は畠地として利用されていた。北側低丘陵の中央最高所に池ノ奥1号墳が、その東側緩斜面上に池ノ奥C遺跡、低丘陵東端部には池ノ奥D遺跡が所在する。

この谷間に遺跡があることが判明したのは、松江東工業団地造成事業計画に伴い昭和57年12月に実施した大井地区での分布調査の結果による。すなわち、谷間東方入り口付近に、須恵器片が点々と散布しているのが認められた。そこで、この遺物散布地に、地形に沿って10mグリッドを設定し、全面を発掘して遺構と遺物の検出に務めることにした。

グリッドは、谷間を南北に分割し、東方入り口側から奥に向かって南側をA-1・B-1……I-1区、北側をA-2・B-2……I-2区と呼称した。(第1図)

調査は、昭和60年度(8月1日から12月27日までのうち計86日間)、昭和61年度(4月7日から9月16日までのうち計90日間)と2回に分けて実施した。



第1図 イガラビ遺跡地形測量図(S=1/800)

0 20m

2. 調査の概要

[昭和60年度の調査]

調査期間および排土の置き場の都合上、A-1・B-1……E-1区、H-1・I-1区、H-2・I-2区の各グリッドについて調査を実施した。また、C-1区についてはグリッドのはば中央に畠の境界を示す石組が南北方向に存していたので、C-1(東)区、C-1(西)区と

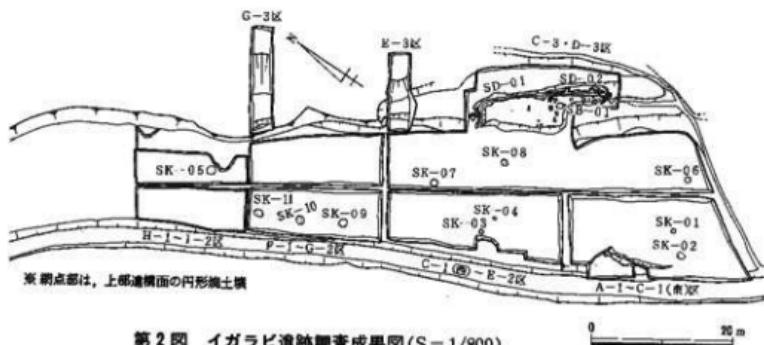
再分区を行った。

調査の結果、上下二つの遺構面を確認し、円形焼土壙5基と多数のピットを検出した。ピット群からは建物を復元するまでには至らなかった。作出した須恵器からおよそ7世紀代から8世紀代頃の遺構と推定された。

【昭和61年度の調査】

昭和60年度の調査において、排土の置き場にしたA-2・B-2…E-2区、F-1・G-1区およびF-2・G-2区の各グリッドについて調査を実施した。さらに、C-2・D-2区北側の緩やかな斜面に、C-3・D-3区を、E-2区およびG-2区北側の斜面に、それぞれE-3区、G-3区の各拡張区を調査の中途で追加した。

調査の結果、上下三つの遺構面を確認し、掘立柱建物址1棟、円形焼土壙6基、またこの他にも、昭和60年度の調査と同様に建物を復元するまでには至らなかったが、ピット多数を検出した。(第2図)



第2図 イガラビ遺跡調査成果図(S=1/800)



3. 遺構と遺物について

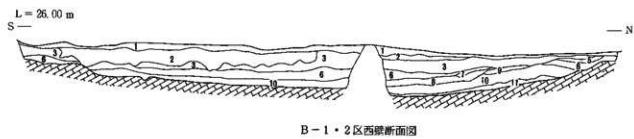
【A-1～C-1(東)区】

この区域は谷間の東方入り口部分に位置し、次のC-1(西)～E-2区とは石組により両されていて、一段低くなっている。

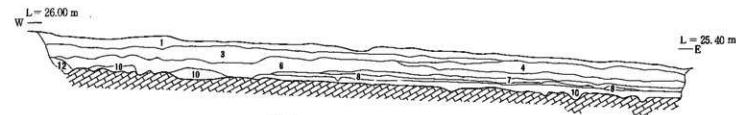
表土から最下層の地山までの間に、表土を含め12層を数える。深さは谷間中央部の1・2区間畦畔のところで、1.0～1.3mを測り、明褐色の地山に達している。2区側では、部分的に黒灰色を呈している。(第3図)

調査の結果、三つの遺構面を検出した(検出層位が異なっていても、平面的位置がほぼ

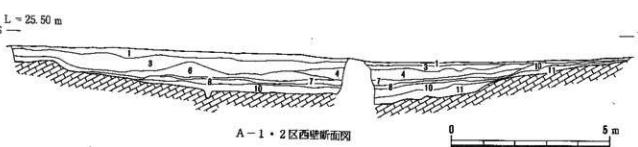
- 1 表土(耕作土) 7 黒褐色土
 2 耕作土下混乱土 8 やや明るい褐色粘質土
 3 深色土 9 赤褐色土
 4 やや暗い褐色土 10 明褐色粘質土
 5 やや暗い茶褐色土 11 明茶褐色粘質土
 6 茶褐色土 12 黑色土



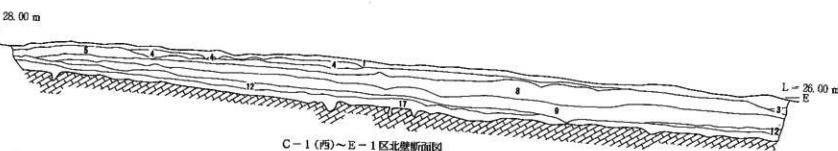
- 1 表土(耕作土) 8 褐色土
 2 やや明るい茶褐色土 15 やや明るい褐色粘質土
 3 深褐色粘質土 16 やや暗い茶褐色土
 4 布穂褐色粘質土 17 明褐色粘質土
 5 黑褐色土 18 茶褐色土
 6 やや暗い褐色土 19 明茶褐色粘質土
 7 混乱土 14 やや明るい茶褐色粘質土



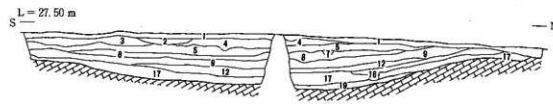
第3図 A-1～C-1(東)区土層断面図 (S=1/120)



0 5 m

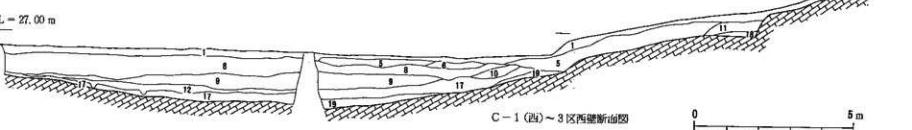


E-1・2区西壁断面図



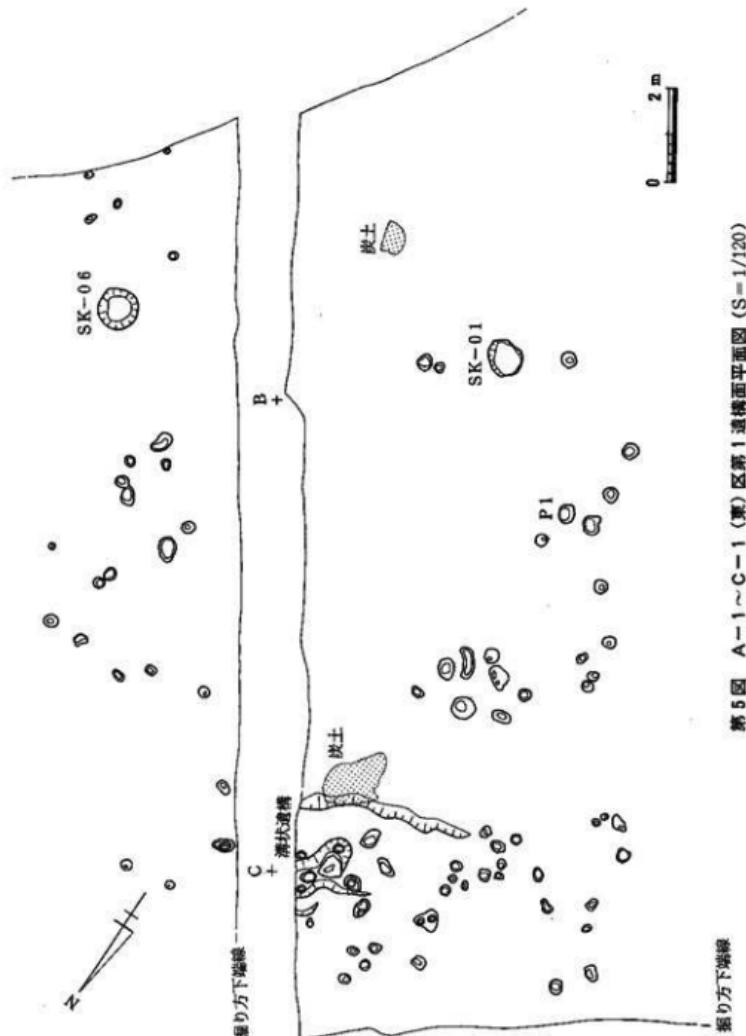
D-1・2区西壁断面図

S —



第4図 C-1(西)～E-2区土層断面図 (S=1/120)

同一と思われる遺構については、同一遺構面であろうとみなした)。遺物は、小範囲にしか存していない5層、9層、12層以外の各層から出土している。また、表土および7層黒褐色土までの堆積土層内から、池ノ奥C遺跡の特殊土器片が37片、池ノ奥1号墳の須恵器



第5図 A-1~C-1(東)区第1遺構面平面図 (S=1/120)

甕片が2片出土している。

○第1遺構面

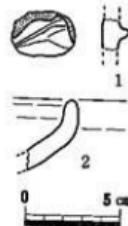
10層明褐色粘質土上面で検出した遺構面である。円形焼土壙2基(SK-01・06), ピット81穴, 炭土2所, 溝状遺構1所を認めた。

ピットの形状, 法量はまとまりがなく, 建物とするには至らなかつた。(第5図)

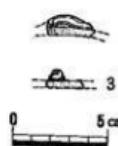
覆土内および遺構面上の出土遺物は, 須恵器が大半を占めるが, 織文式土器片2片(第6図1・2)もみられる。後期のものであろう。P1内からは, 土師質土鉢(136頁第95図427)が出土している。また出土した位置は不明だが, やはりピット内から白磁片(第7図3)も出土している。蓋のつまみと思われ, 作りが丁寧なので中国産とも考えられる。

SK-01(第8図): 平面プランは梢円形を呈し, 上端径80×65cm, 下端径70×55cm, 深さ7cmを測る。側壁上部の極一部, および, 床面の一部が固く焼け縮まっていた。土壙内の堆積土は, 暗褐色土一層で炭が少量混入していたが, 遺物はなかった。

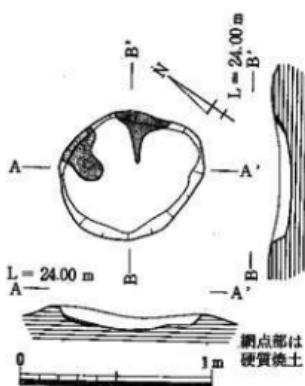
SK-06(第9図): 平面プランは円形を呈し, 上端径88×86cm, 下端径70×65cm, 深さ20cmを測る。壁面上部は厚み8~15mm程の固く焼け縮まつた赤褐色焼土が, 床面4か所には厚み7~19mmの青灰色焼土があった。土壙内の堆積土は, 上層炭が少量混じった暗褐色土,



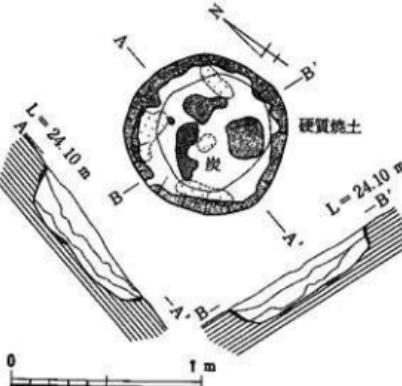
第6図
第1遺構面覆土内出土織文式土器(1/3)



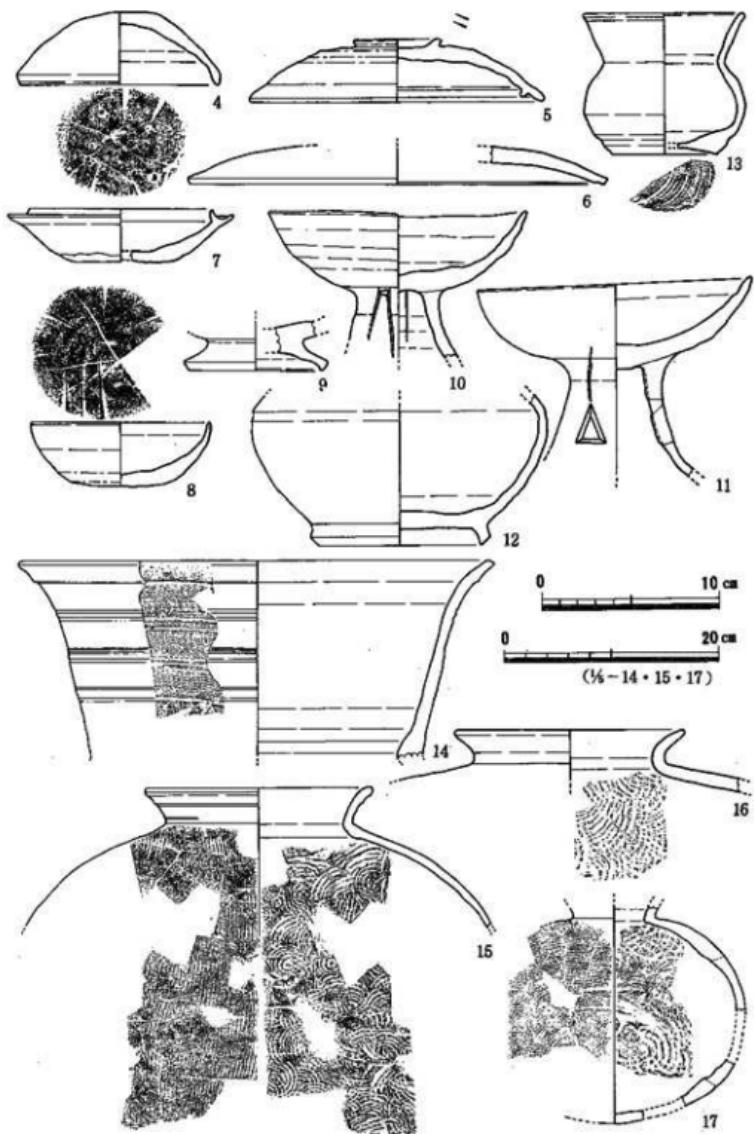
第7図
第1遺構面ピット内出土白磁(1/3)



第8図 A-1区SK-01実測図
(S=1/30)



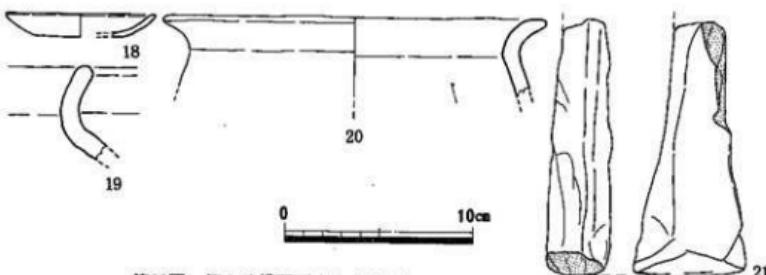
第9図 A-2区SK-06実測図
(S=1/30)



第10図 第1造構面上および覆土内出土須恵器(%, %)

中層1cm角ぐらゐの炭塊を含む褐色土、下層炭土に分かれた。上層から須恵器片、土師器片が10数片出土した。

須恵器（第10図）は、蓋・壺・高壺・壺・堆・甕・横瓶が出土している。4～6は蓋である。4は天井部内面に「×」印の範記号を施し、5には天井部外間に範傷が二つみられ、輪状つまみを付し口縁端部は丸く、かえりの端部は鋭い。6は口径が23.1cmもある大形品である。7～9は壺である。7は、立ち上がりが短く内傾している。8は小形のもので、底部内面に「×」印の範記号がある。9は低脚の付く壺であろう。4・7・8は、高広編年のⅠA期か。^{註1}10・11は高壺で、10は脚部の一方に台形の透しを、他方に範状工具による切り込みを有し、11は脚部の二方向に、上段は切り込み下段は三角形の透しを施したものである。12は壺で高台を付す。13は堆で、底部に糸切り痕を残している。14・15は大甕で、16・17は横瓶である。



第11図 第1遺構面覆土内出土土師器(1/2)

土師器（第11図）は、小形の壺（18）、壺・甕類の口縁部（19・20）、甕片（21）等が出土している。

第12図22は、土馬（須恵質）の脚の一部である。

土師質の土鍤（136頁第95図426）も出土している。

○第2遺構面

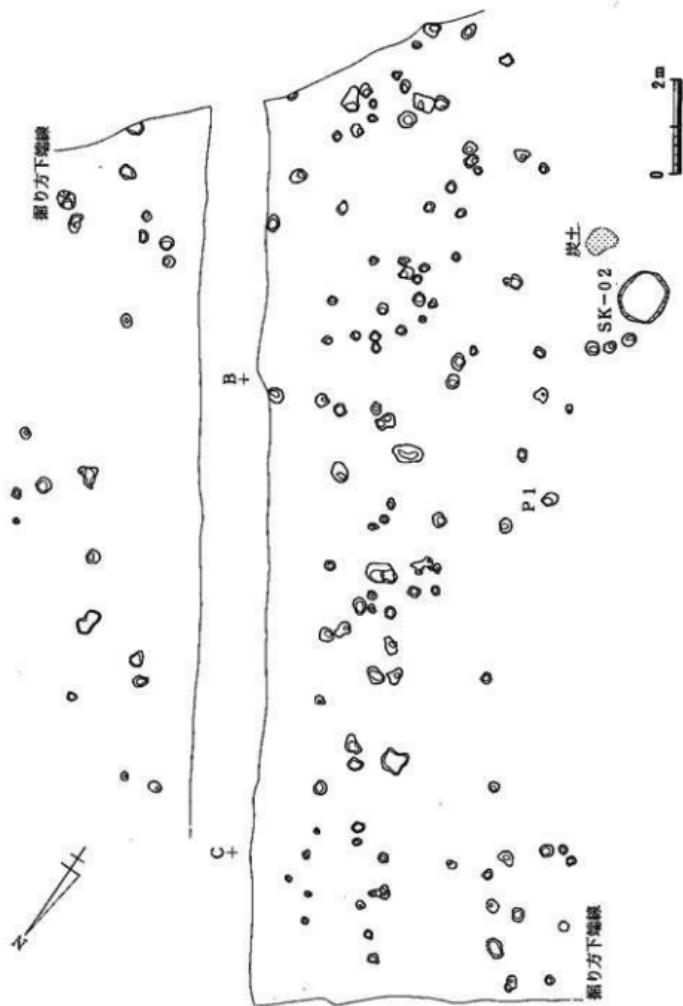


第12図 第2遺構面
覆土内出土土馬(1/2)

1区側では地山上面、2区側では11層明茶褐色粘質土上面にあたる遺構面である。円形焼土壙1基（SK-02）、ピット134穴、炭土1所を認めた。ピットの法量は概ね上端径65×45×深さ35cmから、14×12×11cmぐらいで、形状についてもまとまりがなく、第1遺構面と同様に建物とするには至らなかった。（第13図）

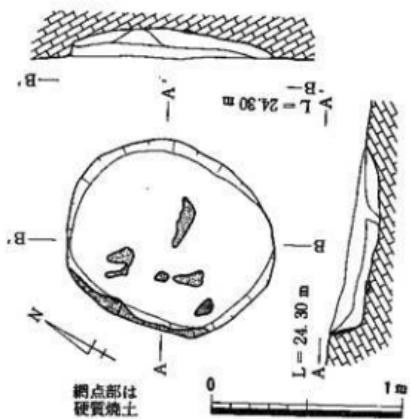
覆土内および遺構面上からは、須恵器、土師器、石鎚が出土している。またP1内から土師質の土鍤（136頁第95図428）、位置は不明であるがやはりピット内から須恵器が出土

第13図 A-1～C-1(東)区断面平面図 (S=1/120)

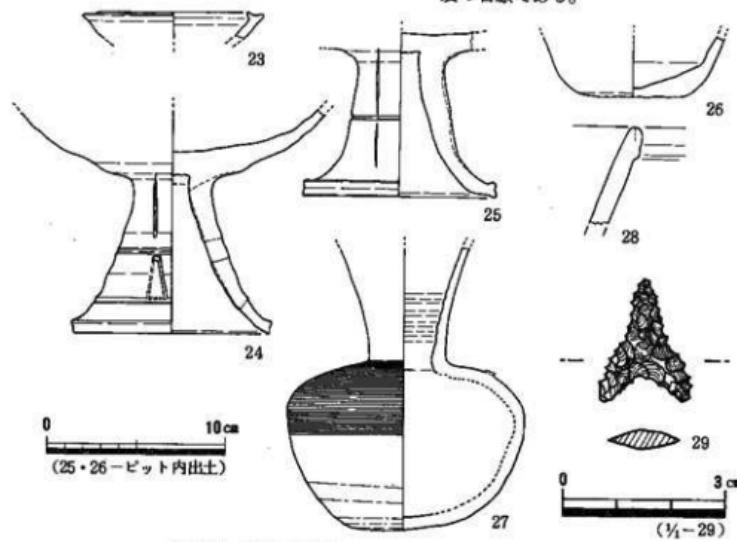


している。一本の沈線を巡らし、二方向に二段の切り込みを入れた高杯の脚部（第15図25）、および、壺（第15図26）である。

SK-02（第14図）：平面プランは楕円形をしており、上端径105×87cm、下端径100×80cm、深さ13cmを測る。西壁上部および床面5か所が固い焼土となっていた。土壌内の堆積土は、上層炭化物を含む暗褐色土、中層やや暗い褐色土、下層炭化物混合層の3層に分か



第14図 A-1区SK-02実測図 ($S=1/30$)



第15図 第2遺構面上および覆土内出土遺物 ($\frac{1}{2}$, $\frac{1}{1}$)

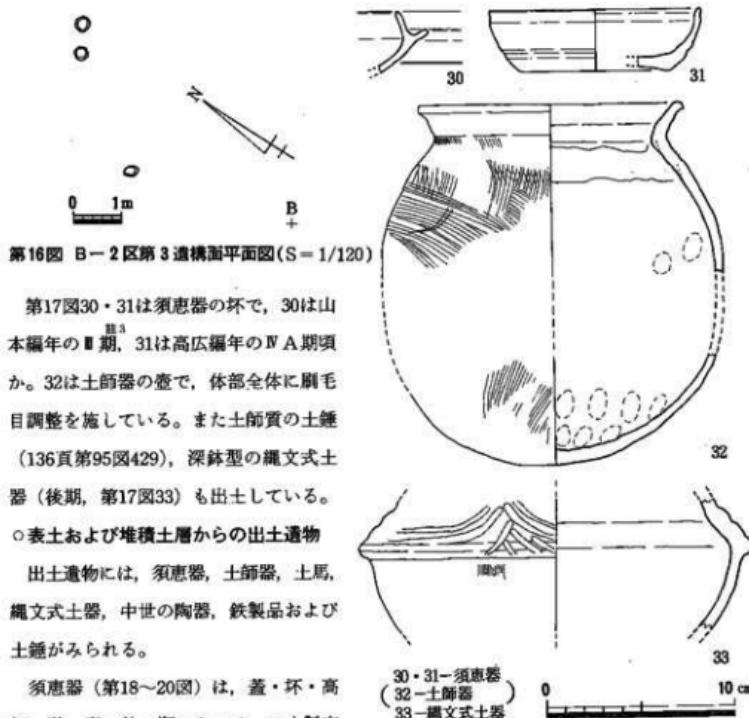
○第3遺構面

B-2区南側の谷底付近の地山面で認められ、上端径25×20cm、深さ15~10cm程度のピットを3穴検出した。地山面上覆土内から須恵器、土師器、縄文式土器が出土しているが、地山面上に遺物はみあたらなかった。(第16図)

れた。遺物はなかった。

須恵器では、壺・高壺・壺・瓶が出士している。第15図23は小形の壺で、立ち上がりが短く内傾しており、高広縦年のⅠA期か。24は高壺で、脚部中央に沈線を一条巡らせ、二方向に上段は切り込み下段は透しを入れている。27は長頸壺で、体部上半に櫛状工具によるカキ目がみられる。28は瓶の口縁部で、突帯部は貼り付けか。

第15図29は、鋳型四三角形の黒曜石製の石模である。



第16図 B-2区第3造構面平面図(S=1/120)

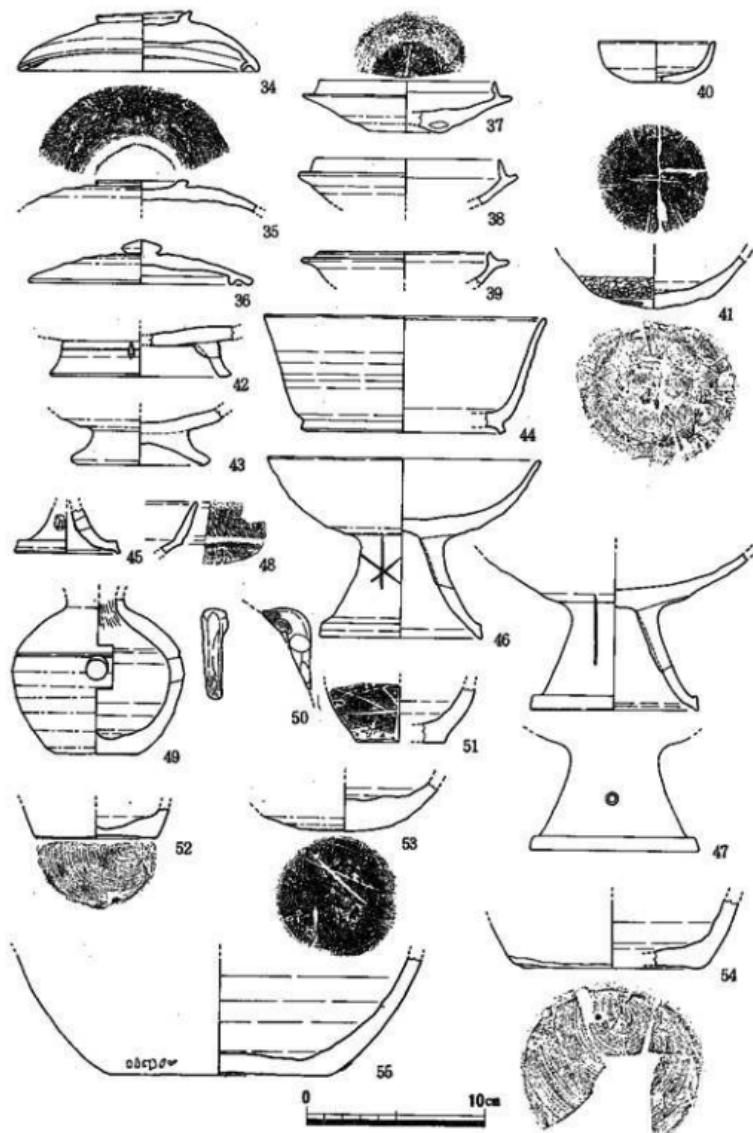
第17図30・31は須恵器の杯で、30は山本編年のⅢ期^{註3}、31は高広編年のⅣA期頃か。32は土師器の壺で、体部全体に刷毛目調整を施している。また土師質の土鍤(136頁第95図429)、深鉢型の縄文式土器(後期、第17図33)も出土している。

○表土および堆積土層からの出土遺物

出土遺物には、須恵器、土師器、土馬、縄文式土器、中世の陶器、鉄製品および土鍤がみられる。

須恵器(第18~20図)は、蓋・杯・高杯・瓶・壺・鉢・瓶・ミニチュア土製支脚・甕が出土している。34~36は蓋である。34は口縁部内側にかえりがあり、輪状つまみを付す。35は天井部外面に竹荀文が二つ観察され、輪状つまみを付している。36は口縁部内側に大きなかえりがあり、宝珠状つまみを付す。丁寧な作りである。37~44は杯である。37・38の口縁立ち上がりは、やや長く内傾し、端部は少し細く鋭い。37の底部内面には、「一」印の範記号がある。39の口縁立ち上がりは短く内傾する。40は小形の杯である。41は外面の底部と体部との境目に、胎土とは異なる別の粘土が貼り付けられ一層している。底部内面には「一」印の範記号がある。42・43は低脚付杯で、42の脚部には4か所(?)に三角形の透しを施している。44は高台付杯である。

45~47は高杯である。45は低脚の高杯で、透しがみられる。46は脚部に貫通している切り込みが一か所あり、その切り込み部分に「×」印の範記号を施している。47は脚部に切り込み二か所と、竹荀文二か所が観察される。



第18図 堆積土層内出土須恵器(1) (%)